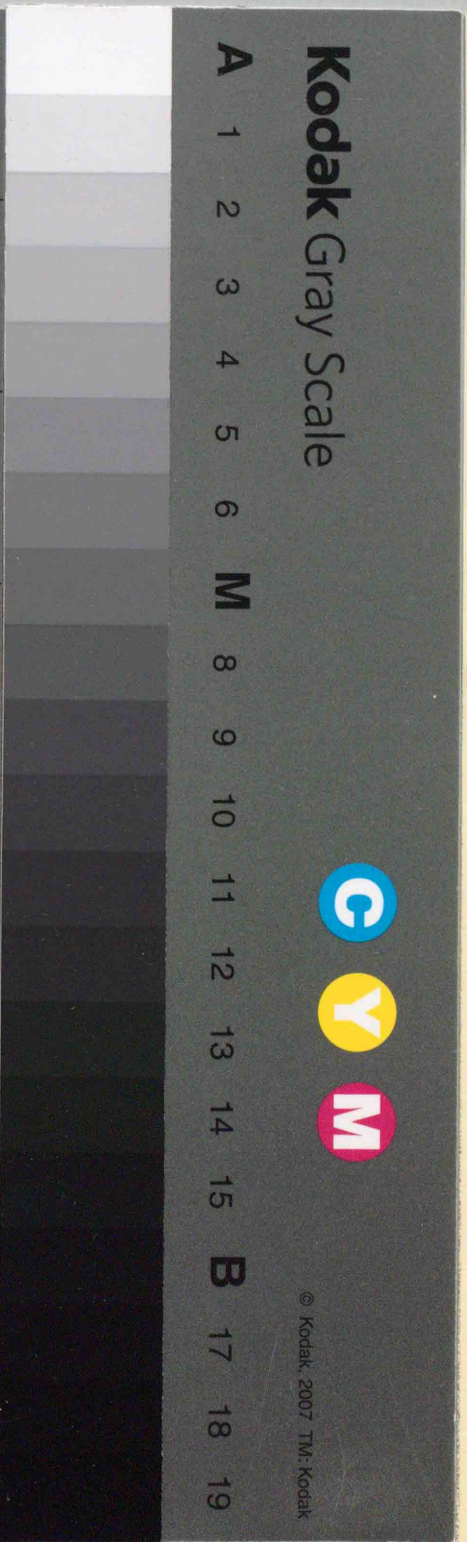
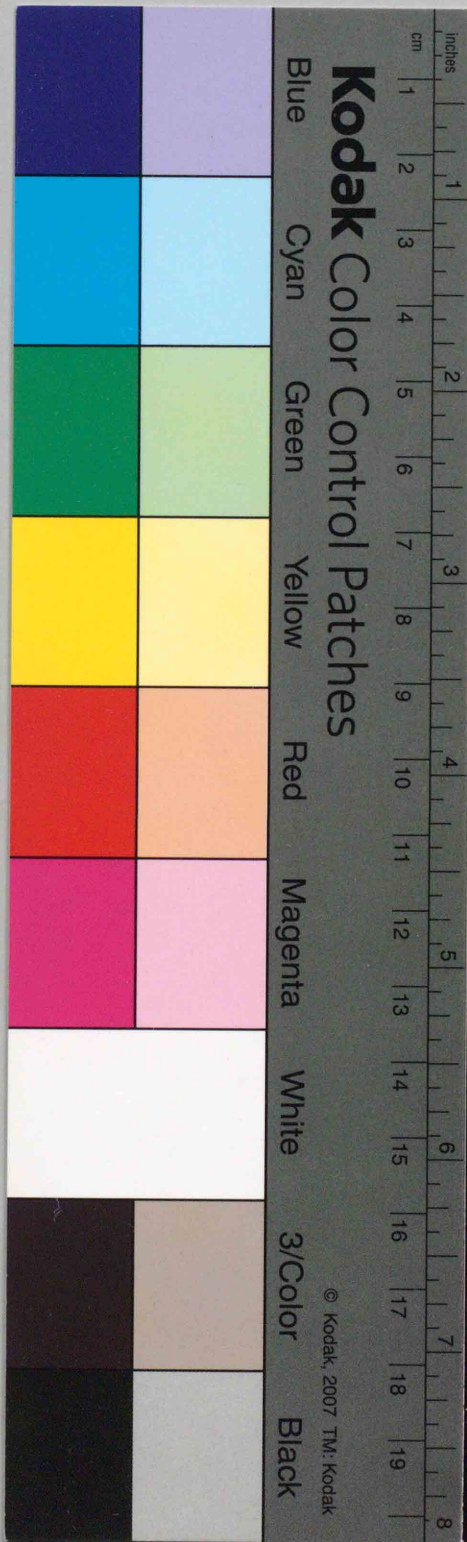
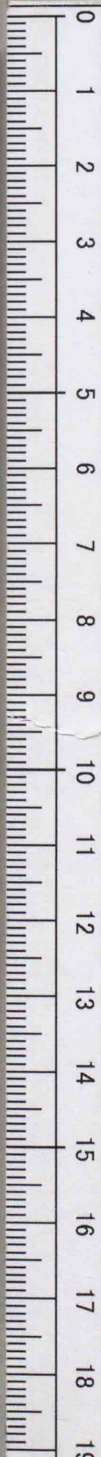
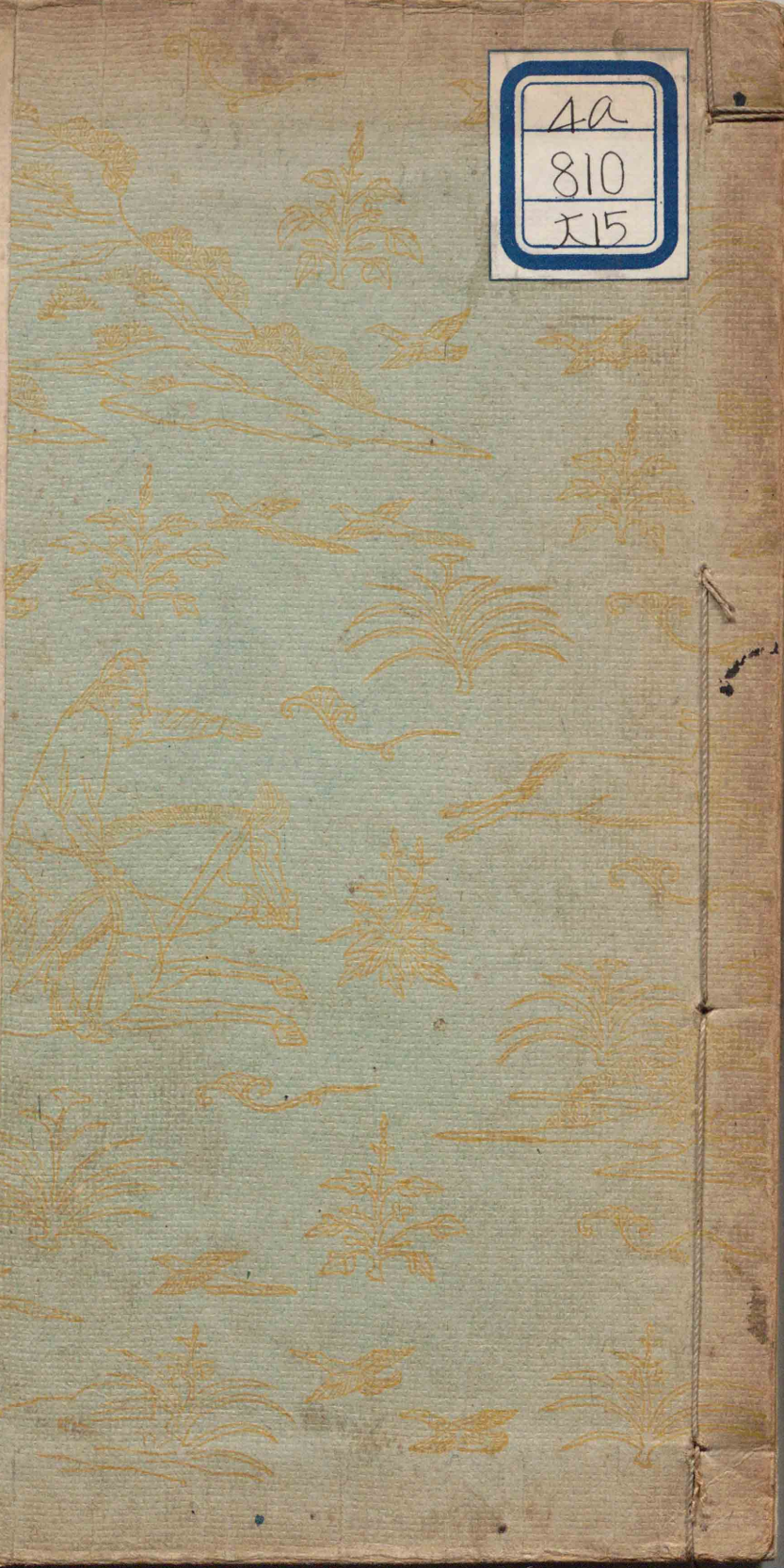


中等國語讀本
新修版
卷一

4a
810
x15



41626

教科書文庫

4
810
41-1926
20000
90671



© Kodak, 2007 TM: Kodak

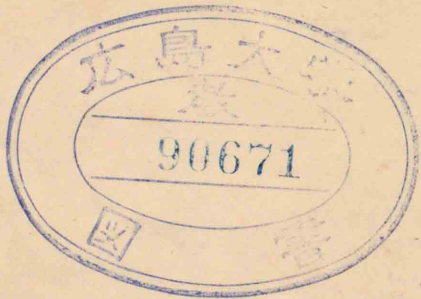


日七十月二年五十五大
濟定檢省部文

用科語國校學中

中等國語讀本

落合直文編
金子元臣補



社會式株
院書治明

資料室

42
810
大15

目次

一	人生の曙	一
二	輝く雲(新體詩)	四
三	さくらの花	五
四	春二篇	九
	一、春暖し	一〇
	二、柔き波	一一
五	學友におくる	一二
六	子供ら	一六
七	國引	三
八	伊勢參宮	三五

目次

一年C組
山崎智徳

Handwritten numbers and brackets at the top of the right page, including 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21.

九	ドンと時計の會話	島崎藤村	一九
一〇	太陽征伐	吉田絃二郎	二〇
一一	初夏の旅	五十嵐 力	二一
一二	走る球(新體詩)	島木赤彦	二二
一三	湖山長者	加藤直士	二三
一四	お玉じやくし	和田垣謙三	二四
一五	日嗣の皇子		二五
一六	スパルタ武士		二六
一七	海舟の苦學		二七
一八	物の上手(俚諺)		二八
一九	笑話三則		二九
	一、梨泥棒		

Handwritten numbers and brackets at the top of the left page, including 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21.

二〇	夏二篇	市島謙吉	三〇
	一、庭	高濱虚子	三〇
	二、畑	若山牧水	三一
二一	箱根の駕籠	スタール	三二
二二	暑中見舞	大町桂月	三三
二三	富士山	金子元臣	三四
二四	山の歡喜(新體詩)	河井醉茗	三五
二五	狂夫の言		三六
	一、かんにん	柳澤淇園	三七
	二、愚公の山	室鳩巢	三八

二六	ポアラと白鳥	古川龍城	二二
二七	驟雨浴	徳富蘆花	二六
二八	佐久間艇長		二三
二九	最後の授業	菊池幽芳	三九
三〇	雀	北原白秋	三八
三一	明治天皇の御遺物を拜すその一	笠井信一	三四
三二	同	その二	三五
三三	忠義の犬	萩野由之	二五
三四	角笛の響その一	吉江孤雁	二四
三五	同	その二	二七

附録

國語假名遣一覽

中等國語讀本

新修一版

卷一

一 人生の曙

曙はまさに一日のはじまりである。實に爽快である。殊に多望である。その多望なのは、すぐ續いて朝がくるからである。やがて晝がくるからである。威勢のいい喜の聲は、太陽の光と共に、段段強まり高まつて往く。

悲も喜もよく知らない幼年時代は、眞闇な夜のやうなものである。それがいよいよ小學校を卒業した少年時代とな

くる(聲)

學一学

ると、全く曙である。ちやうど山の端から射す曙の光に、世間の物象がはつきりするやうに、少年はこれまで氣が付かなかつた世の中が見えてくる。



東 天 紅

そこで、まづどうしてこの世に立つて往かうかと考へる。何になり、何をしたらよいか、自分の性質は、果してどんな仕事に適してゐるかなど考へる。また世の中の事に對して、善いか悪いかの分別もついてくる。ここに自己の修養の必要を感じ、志を立てねばならないことを覺り、また

覺—覺

自己の任務を知り、さてはこの社會國家を改善して往かうなどいふ大きな望も起す。

かうして、少年の心は人生の曙に目覺める。

「若い時は二度はない。全く二度はないから、若い時に勉めなければ、年寄つてから必ず悔ゆる時が来る。むかし徳川頼宣が、大阪の役の初陣に戦功のないのを歎いた時、或人が、御年少の御身、今後幾度もよい機會が御座いませう」と慰めると、頼宣は怒つて、我が十四歳の時は再び来るか」と云つた。又、頼山陽は、十二歳で立志論を作つて、男兒學ばざれば則ち已む、學ばば則ちまささに群を超ゆべし」といつた。これ等は、人生の曙に目覺めた實例であらう。

徳川頼宣

家康の第十子。紀州藩祖。官權大納言に至り、寛文十一年正月薨す。(二二六二年—二三三年)

頼山陽

名は襄、通稱久太郎、安藝の人。漢學者にして、最も史筆に長じ、日大政記、日

本外史等の著あり。天保三年九月歿す。(二四四〇年—二四九二年)

歡—歎

曙が爽快であるやうに、少年の心は爽快である。曙が多望であるやうに、少年は多望である。朝と晝とが曙についてくるやうに、最も威勢のいい青年時代、すべてが成熟する壯年時代が手をひろげて待つてゐる。何と少年の境涯は歡しい勇しいことではないか。

二 輝く雲 (白鳥省吾)

おもひ出の胸にわくごと、
水色の晴れたる空に、
やはらかう雲ひとつゆく。

白鳥省吾
宮城縣の人。
明治二十三年
生まる。早稲
田大學英文科
出身。

三 さくらの花

わが日本の國花として、世界に誇るに足るものは櫻であ

飽かず見る空のけしきに、
ほのかなる晝の月、
心ありげに光なく、
消なば消ぬべく残りたり。
輝けるその雲ひとつ、
遙なる地を見つつゆく。(愛慕)

Cherry チェリー

まがふ



芳賀 矢一

らう。今支那でいふ櫻桃が、櫻に相當するといふことであるが、日本の花の美しさには及ばないこと。西洋のチェリーも、實は大きいが、花の色は薄い。爛漫と咲き亂れた櫻花の、山を埋め谷に満ち、雲とまがひ雪とまがふ景色は、日本特有の美景である。

支那の國花は牡丹である。その濃艶な粧は、美しいには相違ないが、あつさりとした日本趣味ではない。香氣鼻を衝く薔薇の花も、棄て難く美しいものであるが、これも艶冶の態があつて、清楚人を動す野趣に乏しい。しかし、薔薇は歐米人の花の王と稱するものである。

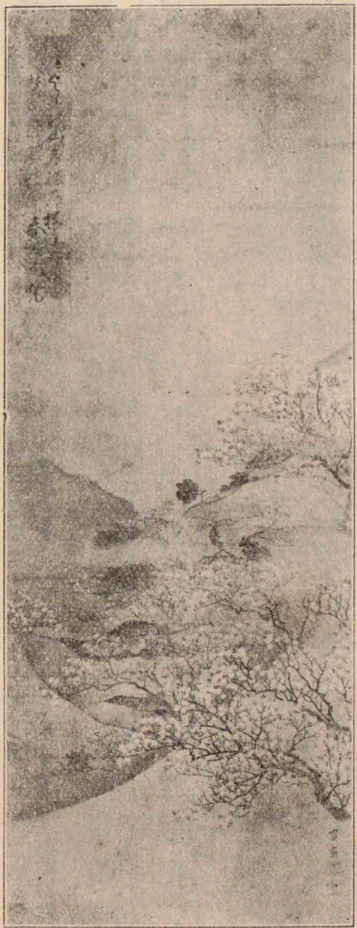
雪 空に知られぬ
拾遺集、紀貫之、櫻ちる木の下風は寒からて空に知られぬ雪ぞ降りけるし。
花ぐはし櫻
日本書紀に見ゆ。允恭天皇の御製。

日本の櫻は、その色は極めてあつさりとして居る。但純白ではない、いはゆる櫻色である。その瓣は極めて薄い。一樹に無数の花を著けて、咲く時は一時に爛漫と残なく咲く。上品な大宮人の風もあつて、楚楚とした野情もそはつて居る。空青く水清い日本の景色には最もよく釣り合つて、深山、都市どこにあつても皆宜しい。甘日草の長い盛もなく、薔薇花の高い香氣も無いが、とにかく見事である。その散つて、空に知られぬ雪と降つては、一段の風趣があつて、殆ど言語に絶してゐる。日本の花の中の花は櫻である。古く「花ぐはし櫻」と歌はれたのは、蓋しこれが爲である。

櫻の咲くのは春の末である。春の日本は水蒸氣が多い。晝

照りもせず云
云
新古今集、大
江千里「照り
もせず曇りも
はてぬ春の夜
の朧月夜にし
くものぞな
き」。

はどんよりと曇つて、寒くもなく暑くもない花曇、夜は照り
もせず曇りもはてぬ朧月夜、雲霞とまがふ花には、最もふさ
はしい景色である。春の特色は、どこまでも駘蕩といふ點に



吉野山 (容齋筆)

あり、溫和な所にあり、峻嚴猛烈といふ心の微塵もない所に
ある。櫻はこの時候に孕まれて咲き出る花である。きは立つ
た特色の無い所が即ちその特色である。

吉野山の歌

八田知紀の
作。

花の雲の句

松尾芭蕉の
作。

鐘一つ云云

榎本其角一鐘

一つ賣れぬ日

はなし江戸の

春

「吉野山霞の奥は知らねども、見ゆる限は櫻なりけり」これ
は満山花に包まれた吉野山の景色を詠んだのである。花の
雲鐘は上野か淺草か。これは「鐘一つ賣れぬ日もなき」大都會
の花に掩はれた光景である。櫻は牡丹、薔薇のやうに花瓣を
賞翫する花では無くして、木として賞翫する花である。否、多
くの木を集めて、人は唯花中にあつて賞翫する花である。上
からのぞいて愛でる花では無くして、下から眺めて愛でる
花である。春風四月、日本人はしばし花の世界の人となるの
である。(芳賀矢一「月雪花」)

芳賀矢一
文學博士。福
井縣の人。慶
應三年生ま
る。東京帝國
大學名譽教
授。國學院大
學學長。

四 春二篇

一、春暖し

桃は咲かねど、春雲日を籠めてあたたかに、梅花も白きはすでに盛過ぎんとし、椿は花葉よりも多く、ぼてぼてとはや落ちそめぬ。綿弓鳴り、鶏鳴き、悠悠として春村に満つ。

田の水もやや温みて、雑草青み、七色の脂浮める土の水を吸ひ水を吐く音びちびちと、土も復活の満足をつぶやくに似たり。

麥の緑ますます濃く、菜の花も咲きそめ、田の畔の野苺も簇簇と芽を吐きぬ。

昨日の暖雨に箱根、足柄雪融けて、富士も麓より四合目あたりまで白衣を脱げり。(徳富蘆花 自然と人生)

あを(青)

箱根

神奈川縣足柄下郡

足柄

神奈川縣足柄上郡

富士

静岡、神奈川、山梨三縣に跨る名山。高さ一二三七〇尺。山頂常に雪を戴く。

徳富蘆花

名は健次郎。熊本縣の人。

明治元年生まる。文學上の著述甚だ多し。

不動堂

神奈川縣三浦郡逗子の海岸にあり。

ざわめく

さわめく

二、柔き波

不動堂に腰かけて海をながむ。

春の海ゆらゆらとして漂ふ。

ある處は大いなる蝸牛の這ひ

たる痕のやうに滑に白く光り、

ある處は億萬の鱗族ざわめく

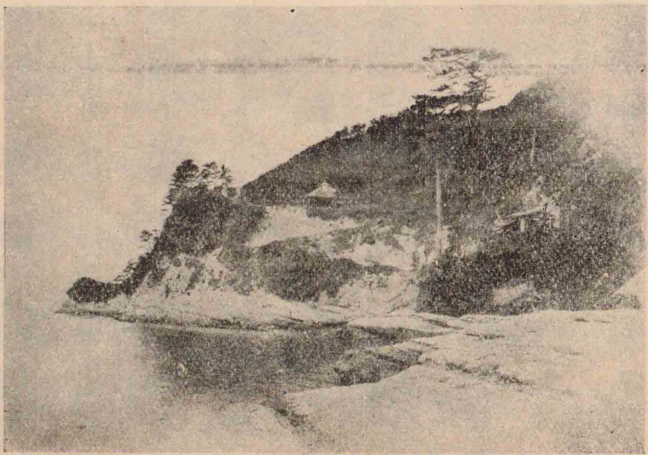
やうに青く顫へり。磯近き水は

透明にして明礬色を帯び、圓き

石箇箇紫の影をもちて水中に

横たはり、茶褐色の藻は梳りた

る髪の如く岩を纏ふ。波といふ



岸 海 子 逗

ほどの波はなくて、ただ搖搖たる海のうねりは、衣の皺をのすやうに、一つづつすうと押し寄せ來りて磯に碎け、岩の凹みに入りてはだぶりと響き、小石に散りてはざあと囁く。見突の舟あり、時時棹を舟の上におとす音かたりと響きぬ。章魚、蝦など突く男あり。ざぶざぶ淺瀬をわたりて足もとより鄰鄰たる銀を踏みいだす。(徳富蘆花「自然と人生」)

五 學友におくる

君、その後は御無沙汰してゐました。御承知のとほり、うちの都合でこんな片田舎に來ましたので、まるで島流にでもなつたやうな氣がします。然し御安心下さい、毎

日元氣よくこちらの中學に通學してゐますから。けれども、校門を潛つてさて教室に著席して見ると、右も左も皆知らぬ顔ばかりで、永年馴染んだ君の姿の見えな
いのが、何としても物足らないのです。君と机を並べてゐたその頃が戀しくてたまりません。いつそ土曜、日曜をかけて、飛行機で訪問が出來たらと思ふことが折折あります。

さうさう、去年のたしか新嘗祭の休日でしたなあ、君のうちが多勢で遊に往つて、生栗を火鉢にくべたら、ほん
と爆發して、一つ二つ火片が散亂したのを、皆が總立になつて拂つた時、君は何といひました、覺えてゐますか。

君は「一軒焼だから安心しろ」と、泰然自若と構へてゐられたではありませんか。僕は實に驚きました。呆れました。そして竊につくづく感心しました。君は決して凡人ではないと。

僕は級中のおつちよこちよいで、頗る氣が短い。君は級中での君子人で、頗る氣が長い。氣質の正反對なこの二人が、誰よりもお互に一番氣が合つてゐたことは、君にも覺がありませう。不思議なものさね。全く僕の短處は君の薰化によつて、段段と直つてゆくやうに思はれて、いよいよ君のそばが離れ難いのでした。しかし運命は君と僕との間に垣を作りました。かうして君と別れて

ゐる僕は、つまり氣短のおつちよこちよいで一生を終るのではないかしらと、氣が氣でないのです。

只君に喜んで頂きたい事が一つあります。それは田舎に來たお蔭に、僕の中からだが近來めきめきと丈夫になつた事です。休日毎に、弟や妹と一緒に田野の間を驅けまはり、折折例の水彩畫をなすつてゐます。そのうちから最近のもの一枚お目にかけます。一つ説明をつけませう。

小川の傍に高い松の聳えてゐる、その下の藁屋が僕等の住居です。土橋の上に立つてゐるのは弟と妹で、川の堤にぼちぼちと色うるはしいのは、實は色汚いのは、若

うるはし

麥一麦

さへづる(囀)

草の中に堇花、蒲公英、蓮華草などの咲き亂れたので、その中には土筆も多く、妹などは時時前垂に一杯にして歸ります。堤の向に緑の濃いのは麥畑、黄色なのは菜の花で、盛に蝶が春の舞を奏でて居ます。霞んだ空にあがる雲雀の影、山陰に囀りかはしてゐる鶯の聲は、さすがに名人の僕でも描けません。君よろしく想像して下さる。

今回はこれで筆をおきます。どうか君の方の近況も知らせせて頂きたいものです。待つてゐます。

六 子供ら

かへる(歸)

「坊つちやん、もうお家へ歸りませう。」と婆やがいつた。子供らは緑の小山の上に遊んでゐた。

「まだお日様があるんぢやないか。子供はかういつた。落日はまだ西の丘の上にかかつてゐた。

「それではお遊びなさい。」

再び子供らは草の上をたのしげに飛びまはつた。最後の日の光が漂うてゐたまで。

このやうな場面を、ブレイクの詩で讀んだことがある。

小鳥と共に目を覺すものも子供らである。太陽と共に躍るものも子供らである。落日の最後の光まで草の中を駆け

ブレイク
英國の豫言
者的詩人。
Blake
(西曆一七
五七年—一
八二七年)

まはる廻

ずり廻るのも子供らである。光に恵まれ、土の香に恵まれ、柔
な春の風に恵まれるのも子供らである。
太陽の光のいかに嬉しく、いかに懐しいかを知るのも子
供らである。

雪がちらちらと降つてくれば躍り、風が吹いてくれば路
次中を走りまはつて歌ふのも子供らである。椿の花に來て
鳴くめじろの眞似をするのも子供らである。落ちた椿の花
を絲に通して、花輪を首にかけては、王様のやうな幸福な心
を持つことのできるのも子供らである。

かりんの花が咲き、柘榴の花が咲いたのを、ほんたうに驚
異の黒い瞳を見張つて、小半日窓から見つめてゐるのも子

うたふ歌

供らである。

賣られてゆく仔牛の背に、秋の雨がそぼ降つてゐるのを、
窓から眺めてゐるのも子供ら
である。

蠶豆畑の隅に、死馬を葬むる
ために深く掘られたばかりの
穴をのぞいて、蹲んでゐるのも
子供らである。

野火を眺めて、未知、神祕の世
界を夢にゑがくのも子供らで
ある。



昔の子供の遊

樂樂

セルロイド
Celluloid

母の背から小な手をのばして、空のお月様が手に取れると信じ切るのも子供らである。

地震があつても、大風が吹いても、母といふものの懐を無限に信賴することのできるのも子供らである。

父の懐から取り出されたおみやげの獨樂一つにも、世界中の光を浴びたやうな幸福を見出すことのできるのも子供らである。

兵隊さんと、玩具店のセルロイドの人形とを一緒くたに考へて、世界中の幸福といふ幸福を黒い瞳に見てゐるのも子供らである。

やがて子供らが娘となり、青年となり、母となり、父となる時、かれ等は太陽の光を知らない、落日を見ない、柔な風を感じない。小鳥の聲を聴かない。

遠い日にわかれた人を思つて、たまに寂しい涙を目に溜めることがあつても、かれ等は「この氣まぐれな心を自分で笑殺する。」

子供の心を失つた人間ほど哀なものはない。生活に追はるる大人の目はいつも黒い土ばかり見つめてゐる。

「空には星があつた。二年に一度ぐらゐる、不圖夜の空を仰いでこんなことを思ひ出すこともある。」(吉田絃二郎—草光る)

圖一四
吉田絃二郎
名は次郎
佐賀縣の人。
明治十九年生
まる。早稻田
大學英文科出
身。現に同大
學講師たり。

七國引

ちひさし小

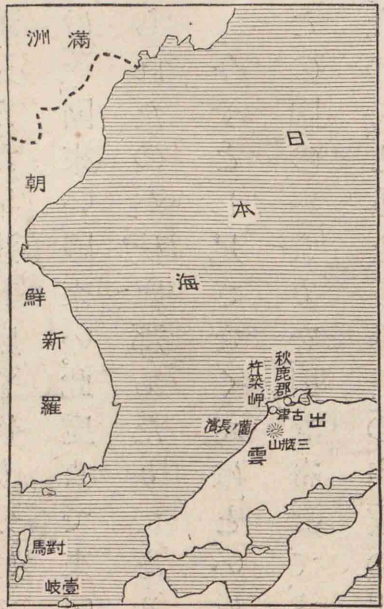
國一國

伊弉諾尊、伊弉册尊がお生みになつた日本は、はじめの程は小くて、足りない處が多かつたのを、子孫の神神が、だんだんに修理をお加へなされたので、今のやうな立派ないい國となつたのである。

出雲の國は取り分け小かつた。ごく幅が狭くて帯のやうであつた。素盞鳴尊の四代目の孫の臣角命かみつねのみことといふ御方が、いかにもこれでは狭過ぎる。ちと縫ひ足さなければいけないと思し召し立たれた。

そこで海岸の巖の上に立つて、何處にか國のあまりは無いかと、遙に西の方を御覽になると、漫漫とした大海を隔て

た彼方に新羅の國が見える。



「おおあるある。新羅の岬に國のあまりがある。あれを引き寄せてこの國に縫ひ合はせよう。」

と、臣角命は神の御力を現して、幅廣の大鋤をとつて、

その新羅の出鼻をずばりと切り分けて、さて三撚みつねりの大綱をうち掛けて、その國のきれに結び付け、えいやえいやと手ぐり、そろりそろりと引き寄せて、國來い國來い。此處まで來いと、とらとり引き附けて縫ひ合はせられたのが、古津ふるつから、杵

古津、杵築の岬、蘭の長濱共に島根縣簸川郡。

三瓶山
島根縣安藝郡

處一処

秋鹿郡
今廢して八束郡に入る

築の岬の邊である。この國引の綱を繋ぎ止めた杙が即ち今の三瓶山といふ山、又その綱は今の藪の長濱である。まだこれでも出雲の國が小さいので、この度は、北の方に國のあまりは無いかと御覽になると、滿洲の方に大分廣い處が見えた。早速其處を切り分けて、又もや三撚の綱をうち掛けて、國來い國來い。此處まで來いと引き寄せて接ぎ合はせられたのが秋鹿郡あたりである。
「今すこし足さなくては」といはれて、東北の方を探して、その國のあまりを引き寄せて、またこれをも縫ひ附けられたので、とうとう今日の出雲の國がすつかり出來上つたのである。

澁川玄耳
名は柳次郎。佐賀縣の人。嘗て東京朝日新聞、東京毎日新聞の記者たり。今辯護士を業とす。

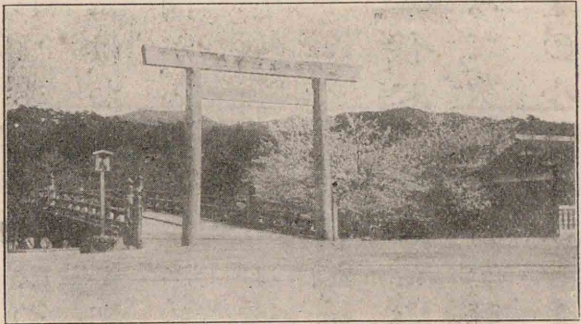
山田
三重縣度會郡

神代から幾千年を経た明治四十三年になつて、あのちぎり残の朝鮮の全部が、遂に悉く我が日本に引き附けられてしまふことになつたのも面しろい譯である。まだまだ世界には、わが日本が智仁勇三撚の綱うち掛けて引き寄すべき國が、いくらかもあるであらう。(澁川玄耳 日本古事記噺による)

八 伊勢參宮

俄に參宮を思ひ立ちて、只今山田に著きぬ。まづ外宮を拜みて、次に内宮を拜む。殊に、内宮の畏さは言語に絶えたり。水底の小魚の數もよまるる五十鈴川の清き流に嗽ぎ、心を洗ひ、名も知らぬ鳥の、奥深く啼く音に耳を澄しつ、緑青色の

かつをぎ
(堅魚木)

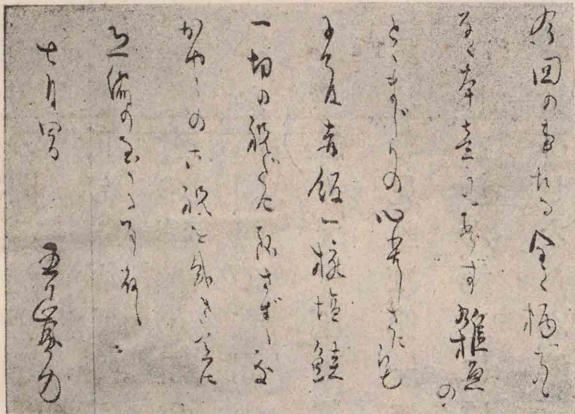


宇治橋

苔にさびたる神杉の太き幹の、天を支ふる柱の如くに立ち
 竝べる間を辿りて、暫く往けば、木立の
 奥、屏の彼方に、千木、堅魚木の金色なせ
 るが拜まる。進みて屏の内に入れば、正
 面の御門には、白布の垂幕長く地に曳
 きて、靜にそよ風に揺られ、その奥にま
 ばらに立てる神杉に護られて、白砂の
 一面に敷きつめられたる間に、神神し
 き白木の御宮拜まれ給ふ。まづ白幕の
 手前なる石段のもとに跪きて、我はわが小き祈を捧げつ。さ
 て、傍に竝びるたる老爺、老婆が拍手を打ちては、溜息まじり

忝さに云云
西行法師の歌
に「何事のお
はしますか
知らねどもか
たじけなきに
涙こぼるる」。

にほひ



に高聲の祈願を繰り返すを聞きながら、心には、西行法師が
 忝さに涙をこぼして額づきし敬
 虔なる態度を思ひ浮べつ。
 大宮は建築における單純の偉
 大を極度に現したるもの如く、
 神杉は樹木の崇高を極度に現し
 たるものといふべし。その杉の根
 方に、瑞瑞しき青苔神代のにほひ
 を吐きて、美しく花咲けり。今日の
 記念にもと思へど、畏ければ手も觸れで過ぐ。御神樂殿にや
 あらん、折しも聞ゆる笙、篳篥の幽寂なる雅樂の音に送られ

て、この神境を辭し、顧み顧み宇治橋を渡る。

神路山の御陰をうつし、御裳濯川の剩れる水を受け入る水田の間の道を、車に揺られながら、この神境が大神の大御心に叶ひし故由を考ふるに、大神宮儀式帳に、

度會の國は朝日の來向ふ國、夕日の來向ふ國、浪の音聞かぬ國、風の音聞かぬ國と、弓矢鞆の音聞かぬ國と、大御意鎮ります國と悦びたまひて、大宮定め奉りき。

とあるを見れば、第一には、山水の景色の類なきを愛でさせ給ひしならん、第二には、地勢、氣候、風土のうるはしさを愛でさせ給ひしならん、第三には、この土地に永久なる平和の可能性のある事をめでさせ給ひしならん、最後には、皇御孫に

朝熊山
三重縣度會郡

五十嵐力
文學博士。文章家。米澤市の人。明治七年生まる。早稲田大學文學部長。

据ゑ。

率ゐらるる大和民族の積極的發展を見そなはさんに都合よき、氣の落ちつく境と思はせ給ひしならんなど思ひふける中に、車はいつか志摩境の名山朝熊山の麓につきぬ。

(五十嵐力—我が書翰による)

九 ドンと時計の會話

一つドンのお話をしませう。

ドンはお晝の來るたびに東京の眞中で鳴りますが、その大砲は、誰にでも見えるやうな處に据ゑてありませんから、「お前さんがドンですか」といつてくれる人は、めつたにありません。

然し、ドンはそのようなことには頓著なしで、隠れた處で毎日よく働きました。時計の針が丁度十二時を指す頃になりますと、ドンは一發、

「只今お晝です」

と、東京中の人に正しい時を知らせます。

ドンはこんなによく働きましても、その割合に褒めてくれる人がありません。それを仲よしの古い時計がもどかしく思ひまして、

「ドンさん、東京の人はお前さんを忘れてゐるのぢやありませんまいか。こんなにお前さんが精出して働いてゐるのに、みんな當前のやうな顔をしてゐますよ。お晝が來れば、お前

さんがただ鳴るもののやうに思つてゐる人もありますよ。ほんとに「縁の下の力持」とはお前さんの事です。」

「そんな事はどうでもいい事です」と、ドンが答へました。私には人に見せびらかす爲に働いてゐるのではありません。見えに鳴るのでもありません。」

その時、時計のいふには、「それはお前さんのいふ通でせう。然しあの鶏を御覽なさい。鶏はお前さんのやうに無愛想ではない。朝になると何度も何度も鳴いて、「もう夜が明けたぞ」とか、「そろそろ起きてもいいぞ」とかいひます。それからあのお寺の鐘を御覽なさい。お寺の鐘もお前さんのやうに無愛想ではない。夕方にでもなると、餘計に好い聲で、「そろそろ日

が暮れます」とか、「もう燈火をつけても好い頃です」とかいひます。それに捨鐘といふものがあつて、「これはおまけです」といひながら、餘分な鐘の音まで聞かせます。あの鶏やお寺の鐘が人に好かれるのは、さういふ愛想の好い所があるからではありませんか。そこへ行くと、お前さんの唯一發「お晝です」ほんとにお前さんの呆氣ない。だから粗末にされるのではないかと思ひますよ。

「そりや、私には鶏のやうな歌はありません。お寺の鐘のやうな音楽もありません」とドンが答へました。

「どうでせう、お前さんが一日休んで見たら」とまた時計がいひました。さうしたら、皆お前さんを忘れてゐたと氣が付

鹿、鹿

はず(筈)

きはすまいか。もつとお前さんの事を思ひ出してくれるやうになりはしますまいか。

ドンは時計のいふことを聞いて笑ひ出しました。そんな馬鹿なことが出来るものですか。もう何年この方、かうして私は鳴つてゐます。一日でも鳴らなければ私は氣が濟みません。東京のやうな大きな都には、いろいろな音や響があつていい筈です。及ばずながら私も、その仲間入をしてゐるのです。私は無愛想かも知れませんが、もし私が休みでもしたら、どうして東京中の人々が正しい時といふものを知りませう。

さういひながら、ドンが時計の顔を見てゐるうちに、時計

の針はだんだんお晝の方へ近くなつて往きました。ドンはもうお話するのをよして、黙つて時計の顔を見てゐましたが、丁度長い針と短い針とが十二時のところに重なり合つた頃を見計らつて、

「ドン」

と一つ鳴りました。

「それドンが鳴つた」と諸方の家の時計が合圖の音でも聞き付けたやうに、あつちでも、こつちでもチンチン鳴り出しました。遠い處や近い處にある工場の笛まで、それに調子を合はせて高く東京の空に鳴り渡りました。

(島崎藤村—をさなものがたり)

島崎藤村
名は春樹。長野縣の人。明治五年生まる。嘗て佛國に遊ぶ。小説詩集等の著甚だ多し。

堪へ。

膽胆

一〇 太陽征伐

太古の或時期に、天に二つの太陽が出た事があつた。一つが西に没すると、他の一つが東から昇つて、晝夜の區別もなぐかんかんと照り付けたので、泉は涸れて魚は死に、草木は枯れて鳥も獸も渴に堪へず、熱さに喘いで段段と影を隠してしまつた。地上にありとある物は片端から焼け爛れる。人は全く安き心もなく、昨日も今日もと多くの人が死ぬので、人間の種も絶滅しさうになつた。

そこで人人が打ち寄つて相談の結果、太陽を征伐して人間の威力を示したらよからうといふ事になり、まづ豪膽な

力強い三人の壯者を擇んで出征させることになつた。指名を受けた三人の壯者は、その遠征準備を遺憾のないやうに整へて、勇しく出發した。

然るに天は高く、太陽への道は頗る遼遠なものであつた。月を重ね年を積んで、行けども行けども只廣廣とした野原ばかり、國を出た時の男盛の三人は、早くもそのうちに白髪の老人となつてしまつた。が、まだ太陽への道は半分も來てゐないのであつた。如何にしたらばよからうと、三人で種種評議した末、ともかく、足早の一人を歸して本國の應援を乞ふこととし、残つた二人は往かれる所まで往かうと、その力のない老衰した足をとぼとぼと運んだ。

すゑ(末)

發一発

絶え。

國に歸つた一人の老人は、更に屈強な若者三人を擇んで、それに各一人の赤兒を背負はせ、粟や蜜柑などの食料品を出來るだけ用意して、再び出發の途に就いた。若者達は途途粟を蒔き、蜜柑を植ゑながら、大急ぎに急いで、やつと先發隊に追ひ付いたが、最早この時は先發の二人は、死期が迫つて息も絶え絶えになつてゐた。後から來た人達を見ると安心した爲か、莞爾と打ち笑んでそのまま死んでしまつた。若者を連れて引き返して來た老人も、今までは大切な任務に氣が張り詰めてゐたものの、目の前に戦友二人の死を見ると、急にがっかりして動けなくなつた。そして若者達にくれぐれも後事を託して、やがて瞑目してしまつた。若者達はこれ

を葬つて、更に道を急いだ。だが、これも途中で老人になつて、次に斃れてしまひ、残るは國元を出た時の赤坊ばかりになつた。尤もその赤坊といつても、その頃はもう立派な青年となつてゐたのであつた。

この三人の青年は種種苦心して、漸くその目的地に達することが出来た。いよいよ太陽に對つて戰鬪を開始した。中の一人が太陽を仰いでその力強い矢を射放つた。けれども太陽は何の傷手も負はず、彼等をさげすむやうに笑ひながら、西天にその姿を没した。残念がつた三人は、更に強弓に征矢をつがへて、新に東天から昇つた次の太陽を目がけて射放つた。幸にも今度は過たず、その眞只中を射抜いた。恐しい

あふ^〇こ^〇で^〇
(仰いで)

歸一帰

大きな音が天地を震動させたと思ふと、眞赤な血の塊が落ちて来て、一人の青年の頭に當つたので、その青年は無慘にも戦死してしまつた。

けれども、今まで焼けるやうに赤く熱く輝いてゐた太陽は、急にその光を失つて、あたりは冷い夜となつた。残つた二人の青年は、ここに戦友の死を弔つて、再び歸國の途に上つた。往く時に第二の壯者達が植ゑ付けておいてくれた蜜柑がよく實つてゐたの



族ルヤイタ

ひる

で、それで喉を潤し、粟の飯を炊いて腹を満して、漸く本國に歸ることが出來た。が、歸つて見ると、誰一人知つてゐる者もない。それもその筈、赤坊の時國を出た二人はもう白髮の老人となつてゐた。そこで人人を集めて、艱苦した委細の話をすると、それではあなた方が太陽を征伐してくれたのですか」と初めて合點し、國中の人人はこの二老人の功勞に酬い

るため、酋長として長く尊崇する事とした。
射られた太陽は月と名づけられた。月の表面にある黑影は、勇しい三人の射た矢傷の痕で、星はその時の血塊の空に飛散したものである。世界に晝夜の別の生じたのも、實にこの時からの事で、爾來熱さの爲に死ぬ者も少くなり、氣候も

人人の生活に調和されるやうになつた。

これは臺灣の生蕃タイヤル族の傳説である。如何やうな障害に遭つても、撓まず屈せず遂に成功した、その忍耐と努力と勇悍とは、全くその民族の尙武的氣風を象徴したものである。かの支那の昔に十の日は出た時、羿ひびといふ人が九つまで射落したといふ話もあるが、それは單なる一場の英雄譚に過ぎない。

一一 初夏の旅

汽車が走るにつれて、赤い罌粟が日の光をいつばいに浴びて、麥畑の間に燃えてゐるのを見出すのも初夏の旅らし

生蕃
臺灣の蕃人中
舊時の風を改
めず、野蠻な
る生活をなす
ものをいふ。

支那の昔に云
云
淮南子に見え
たる故事に
て、帝堯の世
とあり。

Clover クローバ

雲無心にして
云云

陶淵明の歸去
來辭に「雲無
心以出岫」。

乙女峠
神奈川、静岡
雨縣の境にあ
り。

い。 麥は熟れてゐる。緩い傾斜を描いた
クローバの草地には、黄牛が寝ころん
でゐる。

遠い地平線を見れば、黄麥の上に雲
が湧き、雲無心にして岫を出づの句を
想はせる。

汽車の響さへなかつたら、恐らくあ
の麥畑の空高く、雲雀の鳴くのが聞え
るであらう。

箱根には野茨の花が咲いてゐる。翠巒の上に乙女峠の草



乙 女 峠

はひつて

御殿場

静岡縣駿東
郡。富士の裾
野の東端にあ
り。

やはらか柔

燃え。

が輝いてゐる。

富士は見えない。裾野の一部分が雲の下に遠くひろがつ
てゐる。桑を積んだ馬が雲の中にはひつて行く。

御殿場であらう、草と杉と桑との間に白い家の壁が見え
る。蓮華草が咲いてゐる。

名も知らぬ雑木の花が一面に白く咲いてゐる。卯つ木の
種類でもあらうか。野茨は一とかたまりになつて、苗代田の
あたりに柔な蔓のやうな枝をしをらせてゐる。

草は裾野を埋めて、すくすくと青く伸びるといふよりは、
天に向つて燃え上つてゐるといふ感じを抱かせる。

二里三里歩いて行つたところで、人の影一つ見えさうも

ない。

その廣い燃え上つた草の中で、只二人の裸體の若い男が、
赭い土を掘りかへして、一本の電柱を樹ててゐる。今野から
生まれたばかりの原始人の力強さ、男らしさ、自然さが、かれ
等の日焦した顔にも胸にも漂うてゐる。かれ等の眼は野獸
の如く、また嬰兒の如くも見える。

無限なる野の中に放り出された只二人のたくましい筋
肉労働者、一本の電柱、やがて一本の電柱は、天を指して無限
の草原の中に突つ立つてあらう。

夜が明けかかる頃、私は中央山脈を見た。去年亡母が危篤
であつた時、私は同じ汽車で同じ夜明方に、桑畑の間から遠

く中央山脈を見た。

桑畑の上に白く雲をいただいた山山が連つてゐた。美濃
飛驒地方の山山であらうか。あの朝の心を思ひ出しながら、
私は窓をしづかにあけた。故郷に待つ母をもたぬわびしさ
が身に迫つて来る。

伊賀路の山であらうか、遠い麥圃のはてに斜に一脈の系
を描いて青く霞んでゐる。山も家もまだなかば眠心地であ
る。鷹一つ見つけてうれししの芭蕉の句を思ひ、芭蕉の旅心を
偲ぶ。

京都には下りぬつもりであつたが、あの東山の黒い塔や、
見るからに打ち沈んだ古都の空氣を思ひ出しただけでも、

鷹一つ云云
芭蕉「鷹一つ
見つけてうれ
し伊良子崎」
芭蕉
俳人。正風の
祖。松尾氏、
名は宗房、桃
青と號す。江

月に住む。元
 祿七年大阪に
 歿す。二三〇
 四年一三三五
 四年)
 東山
 京都の東方一
 帯に起伏する
 峯巒をいふ。
 知恩院
 淨土宗の總本
 山。鎮西派。京
 都洛東華頂山
 の麓にあり。
 清水
 京都洛東にあ
 り。

Ground
 グラウンド

素通するのは惜しいやうな氣がして、わづかの時間で知恩
 院から清水にまはることにした。
 やつと夜が明けたばかりのやうな朝の氣が、東山に沿う
 た京の町の半分をつつんでゐる。霧が深く山をも塔をも埋
 めてゐる。(吉田絃二郎—草光るによる)

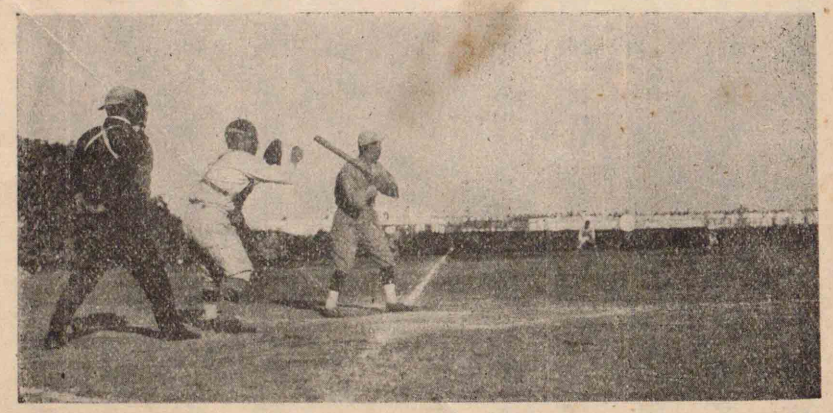
一二 走る球

玲瓏と晴れ渡りたる
 初夏の空の青さよ。
 燦燦と降る白金の陽に
 グラウンドの土は燃えぬ。

聲—声

Uniform ユニフォーム
 Bat バット

校外の廣き畑には
 麥の秋迫りて、
 高き空に囀る雲雀の
 聲もまたいたく老いたり。
 ユニフォームの姿凜凜しく、
 バット振る影くるぐると
 グラウンドの土に動きて、
 ああ男男しき夏は來れり。



一二 走る球

こちよきバットの音は
 高き校舎にこだまして、
 砂を噛んで走る球に、
 ああ若人のころはをどる。

一三 湖山長者

山陰線の鳥取驛から西の方へ三里あまり行くと、鏡のやうな大湖水がある。湖山池といつて、周回四里近くもあらう。西南の方には、丘陵や小山が波のやうに起伏して、春は爛漫と咲いた紅白の花に彩られ、夏は滴る樹樹の翠に潤され、秋は燃え立つ紅葉をもつて飾られる。東北の方には田畑が廣

鳥取驛
 鳥取縣鳥取市

をか(丘)

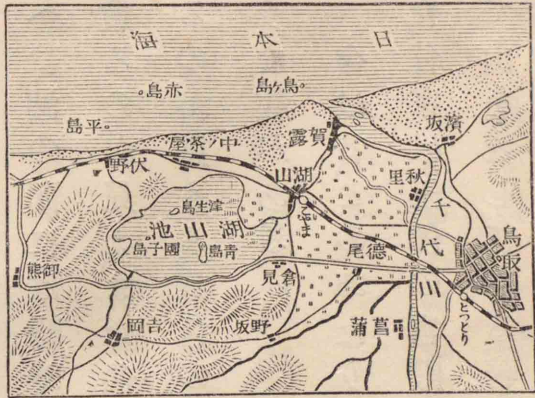
見える

寶一室

廣と連り、砂の丘を隔てて、遙に漫漫と開いた碧の海を望むことが出来る。かやうに山と海とのえならぬ眺を兼ねたうへに、湖の面には、時時蘆荻ロイキの生ひ茂つた間に、鷺鷥ロウの閑眠を貪るのが見え、また仙人めいた舟子の、網を擧げて細鱗を捕るのが見える。景色の雅なこと、誠に一幅の名畫を展げたやうな趣がある。

今は昔、このあたりに湖山長者といふ名高い豪家があつた。住家は王侯の宮殿のやうで、その中には金銀財寶が積んで山をなして居る。著るには美しい綾錦があり、食ふには山海の珍味があり、使ふには數十百人の婢僕があり、そして所有の田地は、見渡すかぎり廣廣と稻の波を打つて居た。たと

たうゑ。
(田植)

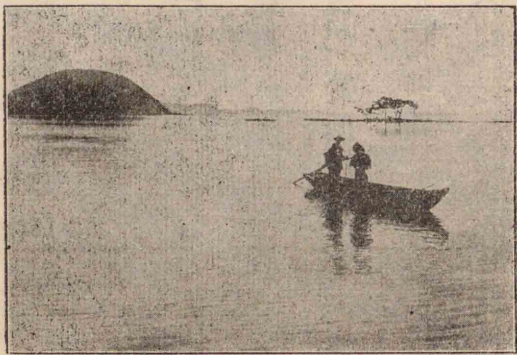


へば、天下の富を此處に集めたかと思はれるばかりで、世の中
 の事何一つこの長者の思ふ儘にならぬものはなかつた。
 ある年の夏の田植時のことである。湖山長者の家では季節中の最上
 吉日を卜して、この廣田に田植をすることになつた。長者の家に使はれ
 てゐる者は勿論、近郷近在の者どもまで、今日こそ長者の田植だといふ
 ので、老幼男女数をつくして身支度かひがひしく、我も我もと田圃をさして出掛けて行く。長者
 は高殿の欄干に凭れて、目も及ばぬ田地を遙に見渡しつつ、

おのれに限ない富に、思はず得意の微笑を漏してゐた。

仕事は面白いやりに運んで、早苗を採る男女の手の動く
 度毎に、濕つた黒い土の色が、片端から青く青く變つて行く。そのうちに正午になつた。やがて夕暮近くなつた。仕事はめきめきと運んだが、名に負ふ長者が廣い田地のことであるから、植ゑるに果しなく、まだ數段を残してあるうちに、日ははや西の山に入らうとした。

長者はこれを見て、ああ今少し日が高くば、全體めでたく濟まうものをと、しばし深い思に沈んだが、つと立つて黄金



湖 山 池

あふぎ(扇)

の扇を持つて来て、さつと開いて、今しも沈まうとする夕日を三度までさし招いた。

見る間に、山の端にかかつた夕日は三段ばかりの輝つて来た。田に立つた村人等は、天道様を左右する長者の威力を見て、いかに驚いたであらう。かくして、これまでと思つた田植も思ふままに捗つて、その日も無事に暮れた。

寢覺の牛の聲がゆるやかに響いて、夏の短い夜はやがて明けた。朝の床を起き出た長者は、入日を招き返した喜と心驕とで、眼中いよいよ何ものもない。傲然とした態度で召使や村人を呼んで、昨日一日で植ゑあげた田の様子を見て來いと命じた。ところが、出掛けて往つて誰一人腰を拔すばか

りに驚かぬ者はなかつた。

驚くのに無理はない。

見よ、さしにも廣かつた長者の田地は迹形も無くなつて、漫漫とした湖が、朝の嵐に白い波を立てて居るではないか。數千人で一日植ゑつけた早苗が、一本も見えないで、渚には群れ立つ蘆が、波に洗はれ風に戦いで居るではないか。

長者の家は、この時から一日一日に衰へた。そして遂にこの廣い田とおなじ運命をもつて亡びてしまつた。

(五十嵐力―趣味の傳説)

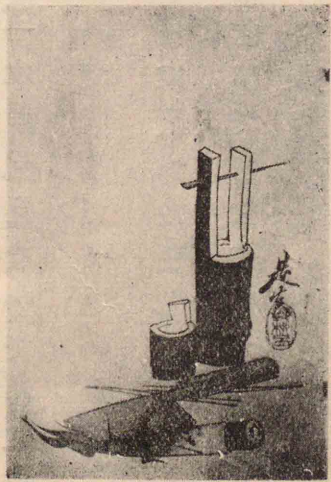
みづうみ
(湖)

一四 お玉じやくし

雜司が谷
東京府北豊島
郡にあり。東
京の近郊。

邊一辺
はじめ

先年私が雜司が谷に住んで、妻子を信州から呼び寄せた時のことである。純粹の農村から、急に東京へ來たのであるから、生活様式が激變して、妻も子供も少からず面食つたやうである。特に子供に一日も無くてならぬものは、遊仲間のお友達であるが、東京の子供とは、殆ど隔絶した言語、習慣を持つてゐる私の子供は、鄰近邊の子供らをすぐに遊仲間とするに都合が悪かつたらしい。東京へ著いて二三日すると、もう寂しがりはじめた。東京はいい所でないといひはじめた。



筆 眞 是

Bucket
バケツ

護國寺
眞言宗新義
派。東京市小
石川區大塚坂
下町にあり。

うづまき
(渦卷)

ある日、九歳になる次女と、七歳になる末男とが尻をからげて、泥だらけのバケツを提げて歸つて來た。バケツの中には、お玉じやくしが一ぱいにうよついてゐる。何處から捕つて來たのかと問へば、護國寺境内の池の中だといふ。そんなに澤山は要らぬであらう、四五疋残して、あとを捨てる。といつても、なかなか肯き入れない。泥だらけのお玉じやくしを水に洗つて、清淨のバケツに移して、水中を泳がせてゐる。私も子供と一所になつて、それを眺めてゐると、中中面白い。まるでお玉じやくしの渦卷である。渦卷の一つ一つが皆生きてゐる。目も鼻もないやうな、大きな頭にすぐ尾がついて、左右に動いてゐる。私はそれを眺めながら考へて見た。子供は

東京へ来て、取りつき處のない孤獨な者になつてしまつた。たまたま護國寺境内へ行くと、その池の中に、子供らの舊知の友達がゐた。それがお玉じやくしである。捨てるといつても捨てられないのは無理がない。このお玉じやくしは、子供らの今まで馴れ親んだ生活習慣にすぎる一本の絲である。その絲を手から離せといふのは無理である。子供らは、夜はそのバケツを枕元へおいて眠つた。捨てられてはならぬと思つたのであらう。

田舎の子供は、多く自然物を相手にして生活してゐる。新鮮な日光と、空氣と大地、大地の上に生育する草木とその間を流れる水とは、彼等の生活の全體と終始してゐる。それに

比べると、都會の子供は殆ど人工物を相手として生活するといつていい。煤煙によごされた日光と空氣、地上には電車の軋る音、それにまじる群衆の渦卷、工場の雜音、活動寫眞の繪看板、淺草の人ごみ、銀座の夜店、八百八街店頭飾立、さういふものの中に生育する子供と、田舎の子供とは、生活の心理に大きな隔りのあるのは勿論である。

都會の子供は、末梢神經が鋭敏に發達して、智恵づきが早く、行狀が對他的に馴されてゐる。田舎の子供は、神經遲鈍で、智恵づきが遅くて、底力がある。どちらが成人の後本物になり得るかは速斷出來ない。(島木赤彦—東京朝日新聞)

島木赤彦
歌人。本名久
保田作彦。長
野縣の人。

一五 日嗣の皇子

皇太子殿下
御名裕仁。明
治三十四年四
月廿七日御誕
生。大正十年
十一月攝政御
就任。

皇太子殿下から私のまづ受けた第一印象は、その御聰明



皇太子殿下

に渡らせられ、眞に帝王の御資質を備へて居らせらるる事である。御性格といひ、御體格といひ、明治天皇の御面影の偲ばるる點が非常に多い。

御身長は五尺五寸位、日本人としては丈はお高い方であらせらるる。御年配の割に筋骨共によく御發達遊ばされ、眉が濃く、唇がすこし厚く、それに御聰明そのものを語つてゐ

らせらるる御眼付は、何處からお見上げ申しても、先帝の御幼年時代、そつくりで、御健康も、御近視眼の外は殆ど間然する所があらせられぬと、侍醫の方方から承つた。あの長い航海中一度も御食事を缺かせられた事がないのでも、普通人以上の御健康體であらせらるる事がわかる。これが何よりも國家の爲に祝しまつらねばならぬ點である。

次に御性質はと申せば、極めて御快活に渡らせらるると同時に、御年配にも似合はせられぬ程御思慮深く、寛容の徳に富んでゐらせらるる。例へば何かの手違で、プログラムの遅延やら變更やらある場合などでも、いまだ曾て御不満の色を浮べられた事はなく、何時も善意に解釋せられて、それ

Programme
プログラム

Pyramid
ピラミッド
埃及の古代
國王の墳。

は却つて善からう」と供奉の人人をお慰めになつた。エジプトのピラミッド御遊覽の日は、折悪しく稀に見る砂嵐で、衣服が眞白になり、吹きつくる熱砂で顔も手も痛くてたまらぬ程であつたが、殿下は却つて、砂漠の本氣分が味ひ得られてよかつた」と仰せられたさうである。何事をも光明の方面からのみ見て、少しも暗黒面から見られないといふ御態度と拜察された。

小栗艦隊司令
長官
海軍中將小栗
孝三郎。

私の最も感動したのは、御生來仁慈の念に富ませられ、下の勞苦に對する御同情の深いことである。東京御出發前、殿下は小栗艦隊司令長官に、石炭積込を見せて貰ひたい」と仰せらるると、長官は非常に恐懼して、何分にも埃だらけで

シンガポール
マライ半島
の極南端、
Singapore
シンガポ
ール島の南
岸。英國領。

寫一写

と申し上げた。すると、いやその穢い作業を特別に見學したいのだよ」と仰せられたが、果してシンガポールでの採炭最中に、殿下は何時の間にか採炭口に歩を運ばせられ、炎天のもと、炭粉濛濛たる中にお立ちになつて、親しく人夫や水兵の流汗淋漓たる作業を御覽になつた。水兵等はこれを見て、俄に勇氣百倍して、殿下がかくまで我々の勞苦をみそなはし給ふ以上はと、互に勵しあひ、普通二日に互る採炭も、その日のうちに立派に終了したといふ。
今一つ私が目撃した御逸事を物語らう。一夕御召艦上で活動寫眞の御催があつて、非番の乗組水兵一同にも陪觀の榮を賜うたことがある。その時、殿下及び供奉員は自然最前

餘一余

列に御著席になり、その背後に士官や水兵が立つて拜觀した。映寫が始ると、殿下は供奉員等に向はせられ、どうもうしろの兵隊達によく見えさうもないから、皆少し頭を俯向けようぢやないか」と仰せられて、御自身から、約三四十分間も、ずつと低くお頭をかかめてお出になつた。かかることは我我人民間でさへ、餘程修養のある且思ひやりの深い長者のみのする事で、多くは反對に自己の特權をこれ見よがしに振り廻す連中のみである。然るに殿下は帝國皇嗣の御身で、かくまでに御同情深く、御謙遜にましますのを見て、私はいたく感激の情に打たれたのである。

我我臣民には一寸想像のつかない點で、しかも殿下には

アレンビー
一九一七年
エジプト遠
征軍司令官
Alleby
に、西曆一
九一九年エ
ジプト總督
Sir Edmund
に任ぜら
る。
Palestine
パレスチナ

著しく目立つて御見受け申し上げらるるのは、どんな場合でも決して物に臆するといふ御氣分がなく、何時でも堂堂たる御言動を遊ばされることである。始めての御外遊で、随分風土、民俗の違つた處にお出でになつても、誰も御注意申し上げぬのに、臨機に適當な御挨拶をなされ、しかもその態度は頗る御立派であらせられた。エジプト統監英國元帥アレンビー卿が、ここより聖地パレスチナは程近く、鐵路十二時間で遊覽が出来る」と語られた時、殿下は言下に、卿が赫赫たる武勳を樹てられた方面に遊ぶ餘暇なきは遺憾の至である」と仰せられたので、元帥は相好を崩して恐悅したとの事である。

點一

○今一つ記すべき點は、殿下はどんな珍しい物や偉い設備を御覽になつても、直に外國の文物に御心醉なされて、日本を卑下せらるるやうな事はあらせられないと思はれる事である。勿論御聰明の質で、外國の長所、美點は一つとしてお見落はなさるまいが、これでは及ばないと驚歎しておしまひになる御模様は一つもない。及ばぬ所は將來及ぶやうに努むべきだと、何時も前途に希望を抱き、彼我を對照して御觀察遊ばすやうに御見受け申した。

物に臆することのない御徳の今一つは、語學の點にも現れてゐた。英語は殆ど御學び遊ばされず、外國語は専らフランス語で、それも御學問所での御課程からいふと、始めて外

國人と外國語でお話になつた事だから、これが普通の學生ならば隨分氣骨の折れる事であつたらう。然るに、殿下は知つてゐられるだけのフランス語は、堂堂と大聲でお話し遊ばされた。一體殿下は非常に大きな御聲でお話しになる。ちよつと不必要と思はれるほどの大きな御聲であるが、これは臣下が二度聞き返す必要のないやうに、御幼少時代からかくは御教育申し上げた爲であらう。軍艦の甲板上の御會話などには、この點は吾吾に取り頗る好都合であつた。

○殿下の御俊邁に渡らせらるることは、吾吾臣民の略拜察し奉つてゐた處ではあるが、如何せん常に宮中雲深き處に在します爲に、その御性格の真相を知るべき機會は極めて

加藤直士
大阪毎日新聞
記者。

Sparta
スバルタ
ペロポネ
ス半島にあ
り。四曆前
五世紀頃ギ
リシヤの霸
權を握れり。

少かつた。然るに今度の御外遊により、一般國民は恰も雲霧を排して天日を仰ぐが如く、親しく殿下の御風手に接し、その御警咳に接する機會を與へられたも同然に、殿下に對して非常な親愛の情を抱き奉ることが出来るやうになつた。これが御外遊の一大副産物として、私共の實に愉快に堪へない所である。(加藤直士—御外遊陪從記による)

一六 スバルタ武士

昔ギリシヤにスバルタといふ國ありき。國民愛國の精神燃ゆるが如く、武勇のほまれ今なほ高し。而して、スバルタ人の教育の方法と生活の状態とを聞くものは、この聲譽の偶

然にあらざるを知るべし。

スバルタ人は悉く武士にして、男子生まれて七歳に達すれば、國立の教育所に收容せられ、王子、王族といへども家庭に人となるを許されず。その教育は、身體の鍊磨と士氣の養成とを主とし、日常の學課は體操、武術、劍舞、軍樂等にして、讀み書きの如きは、餘力を以てこれを學ぶに過ぎず。

教育所における少年、青年の生活は、専ら廉潔、質素、克己、忍耐の氣性を鍛鍊するを目的とし、その規律は頗る嚴格なるものなりき。寝ぬる時は僅に一枚の敷蒲團を用ゐるのみ。その蒲團は、河邊の蒲の穂を集めてみづからこれを作らざるべからず。衣服は重著を許さず。冬もなほ徒跣にて靴を穿つ

もちゐる(用)

を得ず。毎日河水に浴して温湯を用ゐることなく、食物も亦極めて粗悪にして飽食することを許されず。これ他日戦場に出でて飢渴に耐ふる習性を養はんが爲なり。

言語は簡明を貴び、饒舌を誡む。故に今日においても、西洋諸國にては、言語の簡單明白なるを「スバルタ人の答」といへり。又謙讓と從順とは、スバルタ武士の最も重んずる所にして、長幼の序正しく、未成年者は路を行くにも、兩手をマントの下に入れ、視線を地上に垂るるを禮とし、揚揚闊歩するを得ず。公民は總べて未成年者を懲戒する權利を有し、懲戒を受けたる未成年者、若しこれをその父兄に告ぐる時は、父兄は更にこれを懲戒する義務あり。

二十歳に達すれば、始めて共同の教育所を出でて公民の列に入る。しかも、武藝の練習は終生これを怠るべからず。公式、祭儀の席には、老若相合して武勇の歌を誦す。老人まづ聲を上げて、「我等は嘗て武勇なる壯者なりき」と歌へば、壯年これに次ぎて、「我等こそ今はそれなれ。知らぬものは、いざ試みよ」と歌ふ。少年亦これに和して、「我等はやがて更に武勇なる壯者たるべし」と結ぶ。

かくの如き尙武教育に鍛はれたるスバルタ武士は、死を見ること歸するが如く、瓦となりて全からんよりも、玉となりて碎けんことを希ひ、祖國の爲に一命を棄つるを以て、無上の名譽とせり。

瓦となりて云云
北齊書に「寧玉碎すべきも、瓦全なる能はず」

ここに、スバルタ武士の面目の一端を見るに足るべき二
三の美談を記さん。

満一満



ギリシヤの兵士

なる時は、我等の名譽も亦随つて大なり」と。一將又曰はく、「我
等は敵軍の數を知る要なし。唯その所在を知れば足れり」と。
「敵軍將に寄せ來らんとす」と報ずるものあり。將軍叱して

數一數

曰はく、「敵我に寄するにあらず。我敵に寄するなり」と。

スバルタ人の忠勇義烈なるは、ひとり男子のみにあらず。
女子も亦この美德を分てり。一婦人その子の出陣に際し、自
ら盾を取りてこれに授けて曰はく、「勝ちて持ち歸れ。然らず
んばこれに乗りて歸れ」と。

まづく(授)

或時の戦に、一時に五子を失ひたる母あり。人あり、來りて
これを告ぐれば、まづ勝敗の如何を問ふ。我が軍勝てりと聞
きて、喜んで曰はく、「我が子は祖國の爲にこれを産めり」と。

又或時の戦に、討死したる勇士の母は、花冠を被りて街頭
に集り、互にその子の名譽を祝し、敵の包圍に陥りたる將卒
の母は、固く戸を閉ぢて出でず。私にその子の武運拙くして、

圍一圍

祖國の爲に死すること能はざるを悲めり。(國定讀本)

一七 海舟の苦學

勝海舟
名は安芳、舊幕の傑士。のち海軍卿を経て、樞密顧問官となり伯爵を授けらる。明治三十二年一月薨す。(二四八三年—二五五九年)

勝海舟若き頃西洋式の兵術を學びしが、船載の兵書極めて少く、常に良き書の得がたきを歎ぜり。偶市中の書肆を過ぎて新刊の一書を見、これを購はんと思ひてその價を問へば、「五十兩」と答ふ。當時書生の身分なれば、五十兩の金は直に得らるべくもあらず。十數日を経て辛うじてこれを調へ、勇んで書肆にゆけば、かの書は既に賣れてなし。海舟遺憾に禁へず、買ひたる人を問へば、四谷に住める與力某なりと。即ち歩を轉じてこれを訪ひ、切に情を陳べて兵書のゆづりわた

聽—聽

しを請ふ。某聽かず。已むを得ず、借覽を請へどもなほ聽かず。乃ちいはく、「晝間は足下に要あらん。夜間寝ねたる後は貸さるとも不可なかるべし」と。某その執拗に驚き、答へていはく、

「夜更けて後は貸すとも可なり。然れども戶外に持ち去ること許さず」と。海舟その翌夜より通勤を始む。



勝海舟

當時海舟は本所に住み、某の家は四谷に在り。相距ること殆ど一里半。されど雨風烈しき時も、曾て往復を廢せず。又一夜もその時刻を差へず。かくの如くすること半年餘にして、遂に八卷の兵書を手寫するを

をふ(了)

辭一辭
つひに(遂に)

得たり。乃ち更に主人に面會し、全部を寫し了へたることを

告げてその厚意を謝し、かつ二三の不審の點を擧げてこれを質す。主人驚いていはく、「僕は寫すべき勞もなきに、足下の如くいまだ全部を通讀するに至らず。實に慚愧にたへず。野人寶をもてりとも何にかせん。請ふこの書を足下に呈せんと。海舟既に寫せる一部を有すればとて、再三固辭したれども、主人聽かず。遂にこれを



受けぬ。(海舟言行錄)

一八 物の上手

まじはる

すきこそ物の上手なれ。
朱にまじはれば赤くなる。
良薬は口に苦し。
人は一代名は末代。
七ころび八起。
一寸の蟲にも五分の魂。
人を呪はば穴二つ。
めくら蛇におぢず。
問ふに落ちずして語るに落つ。
能ある鷹は爪をかくす。

痛し痒し。
獅子身中の蟲。

一九 笑話三則

一、梨泥棒

寓話作者ラ、フォンテーヌは、毎朝食事後果物を食べる習慣であつた。或朝のこと、あとでと思つて、一箇の梨を煖爐のかざり臺の上へ載せて置いて、一寸書齋へ往つた。その中に、一人の友人が來訪したのでその室へ通した。彼が書齋から出てその室に來て見ると、件の梨が見えぬ。おや、誰か梨を食べたのかしら。友人は何食はぬ顔で、僕ではないよ。君でなく

ラ、フォンテーヌ
佛國の人。
(西曆一六二一年—一六九五年)

和田垣謙三

法學博士。多才にして語學に長ず。帝國大學法科大學教授、農科大學教授に歴任す。大正八年七月歿す。(一五二〇年—一五七九年)

擇一択

て幸だ。實は鼠を退治しようと思つて、あの梨へ亞砒酸を入れて置いたのだ。友人は驚いて、そりや大變だ。解毒劑は無いか。安心したまへ。今のは梨泥棒を見出す爲の計略なんだ。

(和田垣謙三「西遊スケッチ」)

二、老病で

或人その奉侍する君主の逆鱗に觸れ、汝の罪死に當る。覺悟せよ」といふ嚴命を蒙つた。その人は、額を地にすり附けて、「どうぞ命だけは御助け下さるやうに」と歎願に及んだ。それは相ならぬ。しかし死方は汝の選擇に委す。如何なる方法で死にたいか即答せよ。その人畏る畏る頭を擧げて、昔に變らぬ御慈悲あり難く存じます。願はくば老病で死にたうござ

います。王は失笑して、遂に命を助けられた。

(和田垣謙三「西遊スケッチ」)

三、詩人を追ひ出せ

「フェアリー、クイーン」と題する長篇は、英國古代の文學社會に盛名を馳せた詩家、エドマンド、スペンサー氏の著である。はじめ、氏がこの長篇の稿を脱するや、これを當時の貴族ノーサムプトン侯に呈した。侯は受けて、これを誦すること數句に及ぶと、執事を召して、この詩人に賞として二十磅を與へよと命じ、更に誦すること數十句、愈感歎して再び執事を召し、尙二十磅を與へよと命じた。それから進んで誦すること百餘句に及ぶと、益感興を加へるので、三たび執事を呼

エドマンド、
スペンサー、
英國の詩
人、其作「牧
羊者の曆」
及びこの
「フェアリー、
クイーン」等
は最も傑作と
稱せらる。(西
曆一五五二
年—一五九
九年)

市島謙吉
新潟縣の人、
春城と號す。
元早稻田大學
圖書館長。

んで、二十磅を與へよと命じた。然るに、侯は誦するに随つて妙味を感じること愈深く、思はず案を打つて歎賞の末、又しても執事を呼んだが、今度は二十磅を與へよといはない。却つて意外にもスペンサー氏を指さし、一刻も早くこの詩人を追ひ出してしまへ」と命じた。打つて變つた命令に驚いた執事は、何かその詩篇のうち、御氣に障る所でもありませんか」と怪みのあまり主人に問ふと、侯は頭を振つて曰はく、「さうではない。この詩篇を誦すれば誦するほど、その巧妙さに釣り込まれる。その度毎に二十磅づつを與へてゐたなら、恐らく全篇を讀み終らぬうちに、余が家は破産すると思ふからだ」と。(市島謙吉「蟹の泡」)

二〇 夏二篇

一、庭

やう



高濱 虚子

萩の若葉の心のところに油蟲がついて居る。又それに蟻が群つて居る。よく見ると、油蟲は時々痙攣を發したやうに動いて居る。蟻はその上を無造作に這うて居る。これは結局どちらの勝に歸するのであらう。萩は一體おれをどうするつもりだといつたやうに、痒さうに首筋をもたげてぢつとして居る。その萩の下に蟻が塔を作つてゐる。梅雨が大地をほこぼ

生え。

こと柔くしたその土を、山のやうに積み上げて居る。何匹とも數知れぬ蟻が、その山の上を右往左往にさまようて居る。五六匹の蟻が頭を突き合はして何か談合してゐる様子であつたのが、慌しく連れ立つて巢の中に這入る。又連れ立つて巢の中から出て来る。

何處やらに蠅のうなる聲が聞える。

庭の芝生に菌が生えて居る。毎年梅雨の頃にはこの菌が生える。白い小さい菌で、一所に十ばかりもかたまつて生えて居る。また芝生には小さい草花が生えて居る。それはかうやつて芝生にしやがんで居ると、始めて目に入るやうな小さい花である。小さい莖の尖に白い小さい蒼がついて居る。小さいといへ

ば芝の尖に一つ一つ宿つて居る露は馬鹿に小い。裳裾や下駄を濡すのはこの露だ。それよりもいよいよ小いのは菌の傘の端に宿つてゐる露だ。傘の端がぎざぎざになつてゐる、その一つ一つの尖にある露だ。

白い蝶が三匹もつれて松の樹の向に飛んで居る。

一番電車が通る。

雨氣がすぐ近くの山の上に迫つて居る。鄰の松の樹をも霧が包んで居る。

芝生に様様の蟲がゐるのに氣がつく。その中に小さいばつたが居る。これは赤ん坊のばつたであらう。私の下駄の影を恐れて逃げまどふ。他に芝にしがみついて居る一匹の蠅が

とほる(通)

様一様

子規

高濱虚子
俳人。小説家。
名は清。愛媛
縣の人。明治
七年二月生ま
る。雜誌ホト
トギス主幹。

目にとまる。その二つの黒い眼が馬鹿に大きい。

蝶が殖えた。七八匹も松の樹の間を飛んで居る。一匹は私の背中のあたりを飛ぶ。

芭蕉の雪が襟元に落ちる。熱帯の病をこの雪が持つて来たやうな心持がしてぞつとする。青梅が三つ、つぶらになつて居るのが目立つ。その他にもなつてゐるのであらうが、青葉に隠れて見えぬ。

二番電車が通る。(高濱虚子「朝の庭」)

二、畑

私は唐黍の葉がすきである。その實を取るのが望ならば、あまり肥料をやらぬ方がよい。然し見事な葉を見ようと

齋一齋

らば、なるだけ多く施した方がよい。

書齋の窓に沿うた小な畑に、私は毎年この唐黍を植ゑる。今年合間合間に向日葵を植ゑて見た。兩方とも丈の高くなる植物で、一方はその葉が長く、一方はその花が大きい。

一年中さうではあるが、夏は別して私は朝が早い。窓を開けて椅子に倚る頃、戸外がやうやう薄あかるくなつてくる。そのさやかな東雲の微光の中に、伸びるだけ伸び盡したこの二つの植物が、一つは黒ずんで見えるまでの青い葉を長長と垂れて立ち、一つは今朝にも咲き出たやうに鮮な、純黄色の大輪の花を空に向けて咲いてゐるのを見ると、全く眼のさめる思がする。刃のまくれた光の鈍い青龍刀のやうな

若山牧水

歌人。名は繁。宮崎縣の人。明治十八年生。早稻田大學英文科出身。

廣重

浮世繪師。歌川豊廣の門人。江戸の人。名は元長、俗稱安藤徳兵衛。安政五年歿す。東海道五十三次、諸國百景、江戸百景等名高し。(二四五七年—二五八年)

葉と磨き立てた金盃の輝をもつた花とは、朝の畑の異彩である。

夕方になつて、窓からさした電燈の光で見ると、唐黍の葉の兩側には點點として露の玉が宿つて居り、尙よく見ると、その葉の真中にちよこなんと一疋の青蛙が坐つてゐる。不思議にこの葉にはお客様が來て居る。(若山牧水—樹木とその葉)

二二 箱根の駕籠

準備は恰も時計仕掛のやうに、氣持よく處理された。八時三十分に宿を立ち、車に乗つて海岸へ行き、廣重の描いた地點を選んで、幾枚かの寫眞を撮つた。それから早川の谷間を

湯本
神奈川縣足柄
下郡湯本村。
溫泉あり。小
田原より約一
里半。

登つて湯本へ向つた。嘗てはこの流に畫趣を添へた蛇籠も、他處と同じやうに外國式の石の堤防に取り代へられてゐる。途上で幾隊も兵士の行軍に出會つた。大抵は砲兵で野砲を曳いてゐた。

湯本の入口へさしかか

ると、駕籠が待つてゐる。都

合三挺で、水野、前橋兩君の



ルータス

には各二人、わしの駕籠には三人の駕籠昇が附いてゐた。駕籠は小さいやうに思はれたが、實際小さいのだ。軽いことは軽い。竹で丈夫に作つてある。わしの體はとて入れさうに思へなかつた。駕籠は小さくて低くて臺も何もなく、ぢかに地べ

すわる(坐)

擔—担

たに置いてあつた。それでも蒲團だけは氣持よく敷いてあつた。乗手は這ひ込んで後へもたれて兩足を組む。席が窮屈だが、日本式の坐り方に慣れた人には、不自然とも思はれない。わしの上半身は長いから、頭が擔棒につかへて困る。でもうまく這ひ込んで、初の休憩所までいやな思をしながらも忍んだのには、自分ながら驚いた。一旦外へ出たが最後、二度と這ひ込めまいと思つて、休憩所へ著いても、もぢもぢとしてゐたが、首尾よく這込も出來て、前よりもよほど乗心地がよくなつた。

駕籠昇はあとと先と直線をなして行かずに、蟹のやうにはすに進行する。乗手には、少くもわしには、眞直に行かぬや

つゑ(杖)

うな不安な氣がする。駕籠舁が最初棒を肩に乗せた時、駕籠はわしの重みでぶち折れ、短軀な擔夫にはとてもわしが擔げまいと思つたが、二つとも無用な心配であつた。駕籠舁は肩當の上に棒を置き、各自に息杖をもつてゐた。この息杖をば異様に動し、一步毎に地に突き立てる。支になることは當然だが、まるで重みが掛つてゐないやうにおろすから不思議千萬、杖をおろす度に、その上端が廣い圓を描くやうに、調子面白く手を動すが、その具合はとても筆紙には盡くせぬ。足を地におろす時、妙な具合に脛をひねくる。擔夫は行くにつれて、いくらか韻律的にはつはつと聲を出す。初は旅人にいやな思をさせるが、ぢきに慣れてしまふ。

一人の駕籠舁が左右肩を代へる時、交代を呼ぶ時には、節面白い聲を出す。駕籠はとまる。擔棒をもちあげて、神の業とも思はれる程正確に、棒の端が杖の上に乗せられる。肩當を他の肩へ移す、棒はあげられて再び肩の上に落ちつく。わしの駕籠の控の男は、後の擔夫と連れ立つて、世話もしたり必要に應じては手傳もしたが、主な役目は呼ばれた時に前の男と交代するにある。杖の廻轉、脛の旋回、息の喘につれて、とつとと進行したお蔭で、景色を樂む事が出来なんだ。殊に長軀なわしには外を眺めることが苦痛だつたが、それでも折は谿谷の水の奔流、路傍の祠、石の大塊で粗雑に敷きつめた路、すてきな眺望、松の樹、松の成長する地帯の上の高山植



あるかも知れんが、一碗試せばもう十分。碗の中をのぞいて

（廣重）

箱線に入つた。途中二三の茶屋でも休んだし、空家に憩うたこともあつたが、何處も彼處も壯大を見晴だつた。

どんじりの休憩所へ著いた時、此處には特別な産物がある。と水野さんがいつた。名物甘酒である。結構なもので

煙—烟

越え。

見ると、柔な米が浮んでゐて、汁に似て醗酵した飲料であつた。その醗酵作用は砂糖の状態を越してゐないのであらう。この名物甘酒は煙臭い味がした。これが甘酒特有の味であるか否かは、わしの知る限にあらずだ。

かくて最後の阪路を登つた。この最後の阪は雲を攫むやうで、いくら越しても次々と険しい阪が現れる。幾度もほんとのつぺんが見えると思つたが、著いて見ればその上その上とあつて、全く弱つた。けれども、やつとの事で最後の峯を越えた。道はこれから下り阪となる。松と楓の樹がくれに、碧い美しい箱根の湖水が現れた。楓樹は大分紅葉してゐた。やや下ると、蟲蟲とそそり立つた松の竝樹路へさしかかつ

關一関

た。舊箱根御用邸、關所址も過ぎ、漸く石内旅館へかけ込んで、急いで食事を命じた。先刻の杉の竝樹路で、奇妙な事が展開された。それは駕籠舁が夢中になつて歌ひもし、跳ねもした事である。擔夫全體が立ちどまつて、一人が歌ひ出す。この時息杖の回轉が一番熾んだ。體を捻つたり廻したり、脛をあげて輪形を描いたりなどした。それから一時歌や踊をやめて、歩行を始め進行する。この珍珍妙妙な所作が、四五度繰り返された。この時三種の歌が用ゐられた。わしはこの所作は仕事の終了を喜んでするのだらう、又この歌の歡聲の内に宿へ入るんだなと思つたのに、杉の竝樹路を出ると同時に止んだ。水野さんが三種の歌を書きつけた。

をどり(隨)

大井川
源を山梨縣に發し、靜岡縣を貫流して駿河灣に入る。昔は東海道中の難所なりき。

どんな小山も下れば上る、なぜに下らぬ若殿様よ。めでためめでたの若松様よ、枝も榮えて葉もしげる。箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。不思議なるかな記憶よ、わしの雇うた小男の駕籠舁が、山道をせつせと喘ぎながら進んだ時に、過ぎ往ける日と光景とがありありと胸に浮んだ。アフリカの眞唯中で、わしは釣床人夫の組を常雇にしてゐた。彼等も亦息杖を使用し、その釣床は駕籠と似たり寄つたりの彎曲をしてゐたが、大きさは餘程わしに適つてゐた。そして巨大な黒人が八人ついて、四人づつ交代した。二人は前方に、二人は後方に、彼等も亦巡回運動、韻律的運動をしたが、いつも旅の終に來ると足を早

めて小走となり、突然止つて、どつと悦しげな叫聲をあげあげした。(お札博士の觀た東海道)

二二 暑中見舞

御歸の後の消息如何。小生頗る頑健、大暑にめげず肉い



大町 桂 月

よいよ肥えしまりて、昨今は體量殆ど十七貫。この十七貫を日日海水にさからひ鍛へて、既に十五日と相成り候。

叩かば鏘として聲も出づべきこの鐵腕の堅さ黒さ、今は大兄の前も憚るまじく、ならばこの熱沙の自然の土

鐵一鉄

吉田、三阪峠
山梨縣都留
郡。富士山の
北麓。
甲府

山梨縣の首
都。商工業盛
に、葡萄及び
水晶の産多
し。

鰍澤

山梨縣南巨摩
郡。富士川の
畔にあり。甲
府の西南四里
餘。富士川下
の船はこよ
り發して静岡
縣岩淵町に至
る。

富士川

日本三急流の
一。山梨縣笛
吹、釜無、二
川の合流。富
士山の西を過
ぎて海に入る。

俵に一番もまれても見たく候。

明後日は東京より従弟の來るべき筈、來らば直にこれを拉して富士登山を試み申すべく、御殿場より登りて吉田に降り、三阪峠を越えて甲府に入り、更に鰍澤に出でて、舟にて富士川を下らんと存じ候はいかに。大兄が去年の道程は冒險的、小生が今年の計畫は遠征的、興は均しかるべく、趣は異に候。その難は固より大兄の冒險なるに候べし、その壯はむしろ小生の遠征的なるには候はじか。とまれ寄宿舎樓上互に豪興を語り合はん日、言言風雲の氣を帶ぶべくや候はん。貝殻少少小包に託して贈り上げ候。昨日小妹と渚の砂

大町桂月
文章家。名は
芳衛。高知縣
の人。大正十
四年五月歿
す。(二五二九
年—二五九五
年)

清き處にあさりしものに候。山中おのづから霧多しと
聞く。冀はくば自愛し給へ。不備。(天町桂月)

二三 富士山

八月二十四日午前零時、富士山に登らんとて御殿場を發
す。月はいま足柄山の頂を離れて、三尺ばかり天に上れり。そ
の明なること恰も晝の如し。

須走、中畑
靜岡縣駿東
郡。
須山、大宮

そもそも富士山は四面かけ拂の山にて、摺鉢を伏せたる
形したれば、いづれの方面にも登山口あり。東は須走及び中
畑に、南は須山に、西は大宮にありて、皆駿河に屬し、北は吉田
にありて甲斐に屬せり。山の腰より頂上までを十合に分つ、

靜岡縣富士
郡。

をみなへし
(女郎花)

愛鷹
靜岡縣駿東
郡。

一合の距離は、路の難易によりて長短定らず。合の界に石室
を設けて、登山者の休泊所となせり。今わが登らんとするは
中畑口なり。
玉蜀黍や芋の葉の影の、長く短くうつれる畑道を行き過
ぐれば、爪先あがりの草原なり。山百合、女郎花、撫子など咲き
みだれ、露きらきらと光りて、無數の玉を飾り、蟲の聲繁くし
て雨に似たり。

行くに隨ひて、はじめは仰ぎ見し足柄、箱根の連山も、愛鷹
の諸峯も、次第に低くなりて、岡の如く堤の如く、はては平地
の如し。只富士山のみ夜霧の奥に巍然として聳え、我を喜び
迎ふるものの如し。

瀧

風甚だ寒し。午前二時頃ならん、瀧川原の一軒茶屋に立ち寄りて、盛に火を焚きて煖を取る。

馬返まではなほ山の麓にて、いはゆる裾野なり。ここより先は、路嶮しければ馬も利かずとてこの名あり。いつしか樅、檜などの林の間をゆく。月影梢を洩れて鹿子斑の雪かと疑はる。

太郎坊にて金剛杖を買ふ。白木にて長さ五尺。ここを出づれば木盡き草稀に、見渡すかぎり、コークスのやうなる焼石、焼砂なり。生物の聲全く絶えて、只わが砂を踏む足音のみ虚空に高く響く。この山、俗に「草山三里、木山三里、禿山三里」といへるが、木山の五合目まで續けるは吉田口に限り、他は大槪

うるほす

(沾)

寛永山

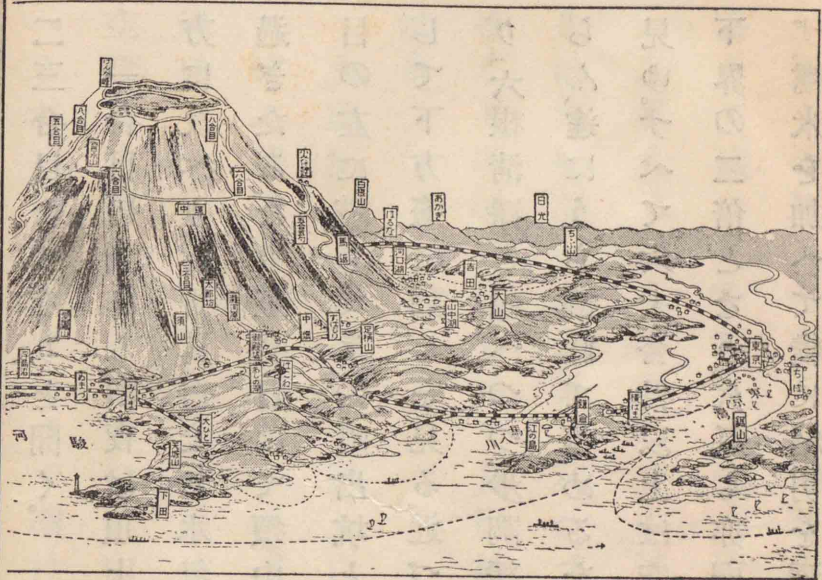
寛永四年十一月噴出す。高さ二七〇〇米

突。

二三合目までなりと聞く。

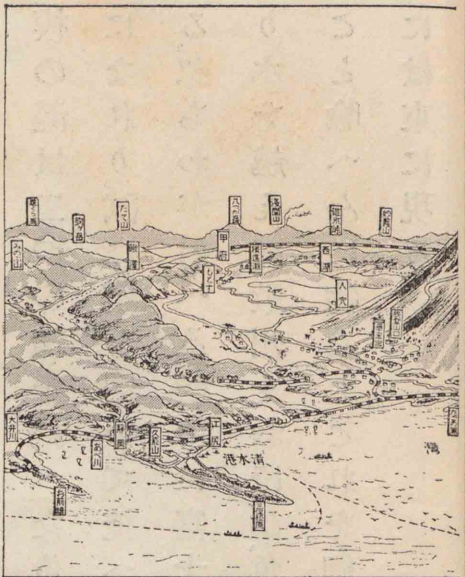
一合目に到れる頃、夜は頂上より明けそめて、次第に麓の方に及べり。折折眞白なる水氣襲ひ來りて衣を沾すは、雲の過ぎたるなり。三合目にて須山口の路と合す。寶永山は六合目の左に敲ちて、その噴出坑と相對せり。忽ち白鷺の點點として下方遙に動くを見る。近づけばみな白衣の富士道者なり。六根清淨と唱へつつ、步調緩に上りゆく。山に酔ひたるならん、途にうち倒れて苦めるを、同行の人の頻に介抱するも見ゆ。すべて六七合目以上は空氣稀薄なれば、人の呼吸數は下界の二倍となり、火氣も亦弱くして、飯を焚くによく熟せず、糯米を加へて纔に粘力を添ふとぞ。

齒一齒



頂上を仰げば、山は殆ど落ちかからんばかりに聳え立ちて、一步は一步より峻し。谷めきたる凹みに雪あり。潔うして碎けたる銀の如し。勇氣を鼓して掘り取りてこれを噛む。齒牙に徹りてつめたし。八合目よりはいはゆる胸突八丁にて、岩石の間に路なき路を求めて上るなれば、胸を突くはおろか、ようせずば、岩

八峯
劔峯、馬背嶽、
雷電嶽、釋迦
嶽、藥師嶽、經
嶽、胸嶽、觀
音嶽



にて額を撲つべく、衣を裂くべし。路の窮りたる處に梯子二つかかれり。午後一時遂に頂上に達す。

象觀測所あり。八峯の中間には、周回十五六町もあらんと思はるる一大噴火口の迹あり。昔はここに水ありて、池を成したりきとか。噴火口の外部を巡るを御鉢めぐりと稱す。その途中、北に金明水、南に銀明水の二泉ありて、盛夏も涸るることなし。又東に缺間ありて蒸氣を噴出す。地に手をあてて試

缺一欠

山中、河口
山梨縣都留郡
本栖
同縣西八代郡
三保の松原
静岡縣安倍郡

みるに熱し。三十分にて鶏卵を蒸し酒を爛すべし。
今や天に近づくこと一萬三千尺。杖を岩頭に立てて長く
嘯けば、風起つて、雲の飛ぶこと頻なり。足柄箱根の山山は蟻
埕の如く、山中、河口、本栖の諸湖は杯水の如し。銀の針と見ゆ
るは富士川か。青き絲と見ゆるは三保の松原か。駿河の海、相
模の灘は二つの鏡を並べたるが如くに光り、末は天と一つ
になれり。試に掌を開いて掩へば、山も水も皆わが手中に藏
る。忽ちわが對へる空中に富士山の影現れたり。裾は山に互
り水を越えて數州をおほひ、色は紫紺にして優美鮮麗なる
こと喩へんに物なし。これを御影と稱す。朝日には西に、夕日
には東に現る。



十 富士山

(影傳吉清味五、生寫真元)

木花開耶姬
瓊瓊杵尊の
妃、大山祇命
の女。

壘一壘

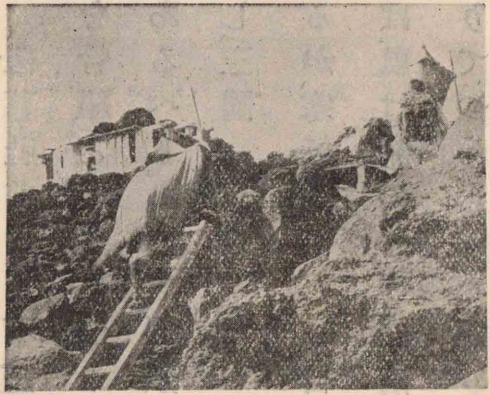
こほり(氷)

木花開耶姬を祀れる淺間の本社を拜す。神官に乞ひて杖には烙印、扇子葉書などには朱印を捺す。

薄暮社前なる石室に宿る。屋根の高さ九尺ばかり、太き木を骨組とし、岩に倚りて石を疊みて造れり。廣さは二十疊もあるべし。あらしき板敷の中央に爐を切りたり。醴酒を名物とし、三國一と稱す。携へたる布子を著、蒲團二三枚重ねて寝たるが、寒氣強くして目も合はず。未明に起きて戶外に出づれば、風は錐のやうに膚を刺し、使ひ棄てたる水は片端より氷りてつららとなれり。乃ち立ち戻りて、蒲團を身に纏ひて出で、岩の上に踞して日出を待つ。

天は清く晴れたれども、脚下は薄黒き雲の波一面にはび

觸一触



富士山頂(駒が嶽)

これり。その雲綿の如し。見る見る東の方ばつとあかく、紫となり、薄紅となり、遂に深紅色となる。さて瞬くひまに朱盆の如き日はさし昇りぬ。忽にして百千筋の金光きらきらとして八方に散じ、天地全く明なり。

降路は須走口を取れり。六合目より太郎坊までの間、砂のうへを滑走して下るを走と稱す。一度躍れば杖も足も止るところを知らず。只風の耳朶に觸るる聲を聞くのみ。この間に草鞋を破ること四足。木山を過ぎ裾野を通りて、須走に著きたるは二十五日の午

前九時なり。登るには十餘時間を費ししもの、降るには僅に二三時間。快なること甚し。

裾野の月、頂上の日出、御影、これを富士山の三大壯觀とす。我はいま一舉してこれを併せ見ることが得たり。富士の山神の我を愛して、この稀なる幸を與へ給ひしにやあらん。

(金子元臣)

金子元臣 東京の人。國文和歌を以て著る。明治元年十二月生まる。御歌所寄人、國學院大學教授。河井醉茗 詩人。名は又平。大阪府の人。

二四 山の歡喜 (河井醉茗)

あらゆる山が喜んでゐる。
あらゆる山が語つてゐる。
あらゆる山が足ぶみをして、

舞ふ、踊る。
 あちむく山と
 こちむく山と、
 合つたり
 離れたり、
 出てくる山と
 かくれる山と、
 低くなつたり
 高くなつたり、
 家族のやうに親しい山と
 他人のやうに疎い山と、

遠くなり
 近くなり、
 あらゆる山が
 山の日に歡喜し、
 山の愛にうなづき、
 今や
 山のかがやきは
 空一ぱいにひろがつてゐる。(醉茗詩集)

二五 狂夫の言

一、 かんにな

或人文盲なるものを意見して、世の交は他の事はいらす。ただ堪忍たしやうの二字をよく守るべしたしやうといふ。文盲の人首を傾け、
「かんにん」とは四字にて侍らずや」と指にて數へ、「御許には思



柳澤淇園筆

違なるべし。かん
にんの四字にて
侍りといふ。意見
したる人、愚味の
人かな。堪忍とは

たへしたへのぶと書きて二字なりといへば、また首を傾け、たへ
したへのぶならば又一字殖えたり。五字となりぬべし。何と仰あ
りとも、我等は四字と思ひ侍れば、四字にてかんにんは致し

殖え。

蟲一虫

侍るなり」といふ。かの意見したる人またいふ、汝が如き愚味
のものは實に諭しがたし。人に似て蟲同様なり。己がままた
すべし」と大いに憤りければ、文盲の人笑ひて、何とも仰ある
べし。我等はかんにんの四字を知り侍れば、悪口せられても
少しも腹立ち侍らざるなり」とて笑ひ居たりきとぞ。

(柳澤淇園「雲萍雜誌」)

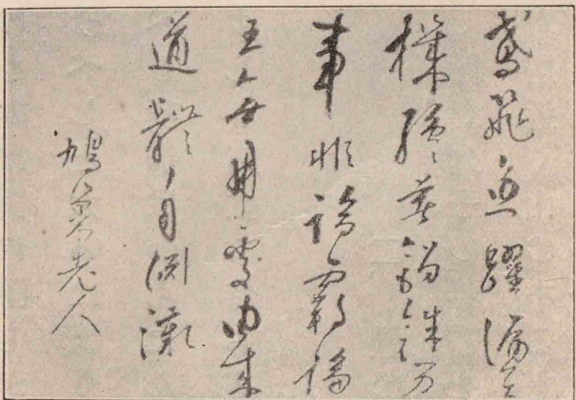
二、愚公の山

諸君列子の著書を見給へりや。愚公といふ人ありけるが、
家居近く山のあるを厭ひて、よそへ移さんとして、日に子供
引き具し、手づから耒耜を執りて、一簣づつ毀ち取りけるを、
智叟といふ人これを見て、「かく大いなる山を、僅なる人の力

柳澤淇園
名は里恭、通
稱權大夫。大
和郡山藩の名
門。文武兩道
に達し、詩歌、
書畫、音樂、
篆刻等に精通
す。寶曆八年
歿す。(二三六
三年—二四一
八年)
列子
名は禦寇。支
那周代の人。
列子八卷を著
す。

笑ひ。
繼一繼

にて毀てばとて毀ち盡さるべきか」と、その愚さを笑ひければ、愚公聞きて、「わが代より毀ちそめて、わが子の代にも繼ぎて毀ち、わが孫の代にも、亦その子の代にも繼ぎて毀ちなば、終に移されざることもやはあるべき」といへば、愈々笑ひけり」となん記し置かれける。元より寓言なれば、この人ありしにはあらねども、愚公がいふやうなる事は、世に智は、世に愚なりといへば愚公と名づけ、智叟がいふやうなる事は、世に智なりといへば智叟とは名づけけるならし。



室鳩巢筆

およそ天下の事、愚公が如くならば、遅くとも一たびは成就すべし。然るに、世に智ありと稱する程の人は、大かた智叟が心にて、愚公が山を移すやうの事を聞きては、その愚を笑ふ程に、何事もその功を成就せぬなるべし。されば、世のいはゆる愚は反りて智なり、世のいはゆる智は反りて愚なり。それ故に、禦寇が世を諷してこそかくはいひつらめ。

(室鳩巢一駿臺雜話)

二六 ポプラーと白鳥

アポロの子フェイトンは、なかなかの美男子で、虚榮心のつよい生意氣な若者であつた。ある時アポロの神殿に赴く

室鳩巢 儒者。名は直清、通稱新助。江戸の人。初加賀侯に仕へ、後幕府に仕ふ。享保十九年歿す(二二三一九年―二三九四年)
アポロ ゼウスの子。希臘神話中の主なる神。
Apollo

Phaethon
フェイトン

藥—藥

と、アポロは微笑しながら、

「お前の欲しい物は、何でもやらう。」

といつたので、フェイトンは大いに喜び、

「あなたが毎日お乗なされる、あの金色の車をお貸し下さい。」

「いやいやこればかりは貸せない。もしもお前がそれに乗

り歩いたら、そこから中火の海になつてしまふから。」

とてなかなか許さなかつたが、強ひて願ふので、遂に許して、

その車から放射する焦げつくやうな熱い光線を防ぐため

に、フェイトンの體に膏藥を塗つてやり、自分の陽の冠を彼

の頭にかぶらせ、かの恐しい金色の馬車のそばへ連れて往

つた。

「お前、この馬車へ乗つたら、綱をしつかり握つて居ないと馬があばれ出すぞ。鞭であまり叩かないやうにし、北や南の方角には行かず、唯中央のよい道路を歩き、そして又あまり高く上つたり低く下つたりしてもいけないよ。」

「はいはい解りました。」

と彼は上の空で聞き流し、忽ちひらりと件の馬車に乗りうつり、一鞭當ててがらがらと驅け出した。

この車は黄金を練つて造つた四輪車で、四頭の駿馬がこれを曳く。馬は五體が炎を以て包まれ、性質は極めて獍猛であつて、アポロ以外の者の命にはなかなか従はない。ところが馬の方では、乗手の重さがふだんとは違ふし、手綱を捌く

ネプチューン
 希臘神話の
 海神。ゼウ
 ス、ハデス
 と兄弟にし
 て、天、海、幽
 界を分ち治
 るといふ。

手が主人の手でない事を感じ、段段横著になつて來た。それを知るや知らずや、フェートンは意氣揚揚と、赫奕たるその金車に駕し、鞭を盛に振ひつつ、虚空の常軌を馳せ行く中に、四頭の駿馬の足竝は次第次第にせはしくなつた。がらがらながら、車も軸も熱して融けよとばかり急轉し出した。炎に燃え立つ馬は、先を争つて嘶き叫んで、一目散に駆け狂ふので、フェートンはどうしても制することが出來ず、或は高く九天を脅し、或は低く大地を打ち壊さんばかりに荒れまはるので、森林の樹木は忽ち火を發して大火事となり、河川の水は忽ち沸騰して乾涸びた。

そこで海神ネプチューンはゼウスを訪れて、この災を除

ゼウス
 希臘神話中
 の主なる
 神。

Eridanus
 エリダヌス河

Poplar
 ポプラ

Ethiopia
 エチオピア
 亞弗利加の
 北部埃及の
 南方にあり
 し古代の王
 國。

くやう懇願したので、忽ち雷電を發し、フェートンを打つてエリダヌス河に落した。

フェートンの三人の姉妹は、身も世もない程に明け暮れこれを歎き悲んだので、ゼウスはその悲を救つてやるとて、三人をそのエリダヌス河の河邊のポプラの樹に化せしめた。姉妹の涙は葉末の露と落ちて、音もなく水中に凝つて琥珀の珠となつた。今でもその河のほとりにポプラの樹が茂つて、殆ど乾くひまもなく、その葉末からほたりほたりと露を滴して居るのは、かうした謂れがあるからである。

又今でもエチオピア人たちの顔が眞黒なのは、フェートンの火の車の炎に焦されたからだといふ。

Cycnus キクヌス

古川龍城
者。國民新聞記

多摩川
山梨縣丹波川
の下流。東京
府に入り荏原
郡羽田村に至
り海に入る

さてフェートンの友人キクヌスも亦友の死を悔み悲み、亡友のはかなく消えたエリダヌス河を始終のぞき込んでゐるので、フェートンの父アポロはこれを憐み、彼を一羽の白鳥に化してやつた。そこで白鳥は河の上に浮遊しながら、折折は丁度その亡き友を探すかのやうに、水中を見つめたり、又は悲しさうな鳴聲を出したりしたとか。

(古川龍城「星のローマンス」)

二七 驟雨浴

西は本氣に曇つた。雷様も眞面目に鳴り出した。もう多摩川のむかうは雨が降つて居るであらう。自分は大きいそぎで

下りて、庭に乾してあつた仕事著や跣足袋を取り入れた。風がひやりとした。日傭の婆さんも大きいそぎで干麥や麥稈を取り入れて居る。

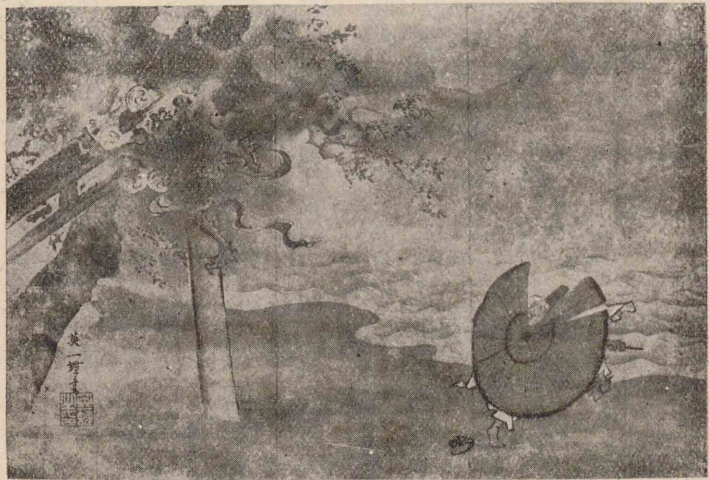
座敷の南縁に立つて居ると、ほつりと一つ大きな白い粒が落ちて、乾いて黄粉のやうになつた土にころりところんだ。次いで大粒、小粒、小粒、大粒、かはるがはる斜に落ちては、地上にもんどり打つて團子のやうにころがる。二本松のあたりは薄墨色に掻き消されて、推し寄せてくる白い驟雨の進行が、目に見えて近づいてくる。

自分は久しく海員の海上生活を羨んで居た。總員入浴用意の一令で、手早く著物を脱ぎ棄て、石鹼とタオルとを両手

Towel タオル

ころは、新式の河童である。不圖思ひついで、自分は頭上の硝子鉢を仰むけにし、兩手で支へて立つた。一つ二つ三つと三十ばかり數へると、取りおろしてぐつと一氣に飲み乾した。やはらかな天水である。二たび三たび興に乗じてこの大觴を重ねた。

「もう上つていらつしやい。」
妻が呼ぶ頃は、夕立の中軍まさに殺到して、四圍は眞白にな



（英一蝶筆）圖の雷浴

つた。電がびかりとする。雷が頭上で鳴る。ざあざあ落ちて来る。太い雨に身の内撲たれぬ處もなく、ぐつと息が詰る。驟雨浴もこれまでと、瀧の如く迸る樋口の水に足を洗はせて、身震して縁に飛び上つた。

上ると、どしや降になつた。庭の平たい甕の水を、雨が亂れ撲つて、無数の魚兒のあぎとふやうに跳ね上げて居たが、それも最早見えなくなつた。

しばらくして、夜の明けるやうに西の空が明るくなり出した。あがり際の織い雨が白絹絲を閃す。一足縁に出て見ると、東南の空は今眞闇である。最早夕立の先手が東京に攻め寄せた頃である。二百萬の人の子の、周章てふためく態が眼

に見えるやうだ。

何時の間にか、ぱつたり雨は止んで、金光いかめしく日が現れた。見る見る地面を流れる水が止つた。風がさつと西から吹いて来る。庭の青松がばらばらと葉を散す。何處かで蝸がかなかなと心地好ささうに鳴き出した。

時計を見ると二時三十分。夕立は唯三十分續いたのであつた。

浴衣を引き掛け、低い薩摩下駄を突っかけて畑に出た。さしも乾いて居た畑の土がしつとりと濕つて、玉蜀黍の下葉や、コスモスの下葉が、刎ね上つた土まみれになつて、重げに垂れて居る。何處を見ても嬉しさうに緑が戦いで居る。東の

濕—濕

コスモス

Cosmos

高尾、小佛
共に東京府南
多摩郡。

方では雷がまだ鳴つて居る。

「虹收^{レドモ}仍白雨、雲動^{ケバチ}忽青山」。

かく打ち吟じつつ西の方を見た。高尾、小佛や甲斐の諸山は濃淡の碧も鮮に、富士も一筋白い豎縞の入つた淺葱の浴衣を著て、すがすがしく微笑して居る。

蝸がまた一聲鳴いた。(徳富蘆花「蝸のたはこと」)

二八 佐久間艇長

從—從

佐久間大尉
(二五三九年
—二五七〇
年)

猪突敵におもむくは易く、從容死に就くは難し。殊に不慮の禍に遭ひて毫も狼狽することなく、應急の手段盡くるに至りて、自ら責任を重んじ、從容としてその職に殉ぜし佐久

吳鎮守府
廣島縣吳市に
あり。
岩國
山口同縣玖珂
郡。

加へ。

間大尉の最後のごときは、最も難しとする所なり。
明治四十三年四月十五日、吳鎮守府所轄第六號潜水艇は、
周防の國岩國新港の沖合約一里の處にて、各種の演習に従
事しけるが、機關に故障をや生じけん、俄然海底に沈没して
その行方を失ひぬ。母艦、僚艦の乗組員は大いに驚き、直に百
方搜索を始め、また無線電信にて急を鎮守府に報告したり。
されば、府にては即刻軍艦豊橋に派出救助の命を發し、なほ
驅逐艦および水雷艇數隻をも加へて、遭難地に急行せしめ
たり。

かくて搜索の結果、翌十六日午後に至りて、漸くその沈没
の地點を發見したれば、直に引揚に著手し、十七日の朝、辛う

潜—潜

じてその作業を終へ、艇内の排水と換氣とを行ひ、ここに始
めて艦内を検するに、潜水後すでに數十時間を経過したる
ことなれば、艇長佐久間大尉は、腕を拱きたるまま端坐して



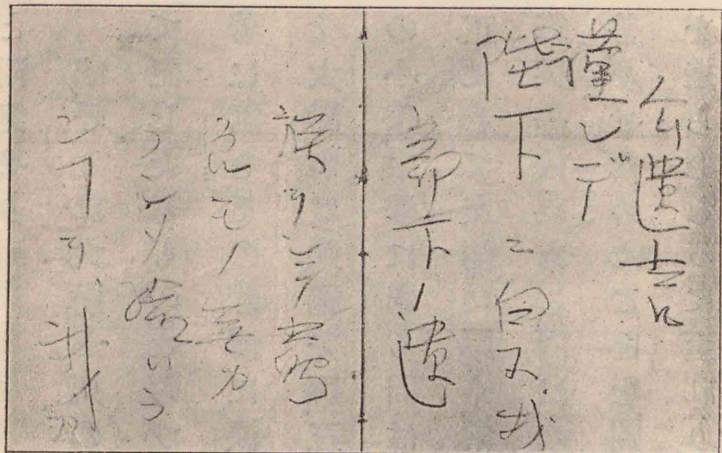
佐久間大尉

絶息し、部下の乗組員將卒十一名
の勇士、いづれも、或は仰臥し、或は
安坐せるまま勇敢なる死を遂げ
て、艇とその運命を共にし、光景頗
る悲壯なり。

その臨終の際、即ち艇の沈没後、午前十一時より午後零時
四十分までの間に、大尉の書きたる日記あり。その言言句句
至誠より出でたるものにあらざるはなし。その一節にいは

ひとへに
(偏に)

艇員一同死に至るまで皆よくその職を守り、沈著に事を
 處せり。われらは國家のため職に斃るといへども、ただ遺
 憾とする所は、天下の士の事實を誤解して、ために將來潛
 水艇の發達に打撃を與ふるに至らざることなきかにあ
 り。希はくば諸君益勉勵して、將來潛水艇の發達とその研
 究とに全力を盡されんことを。
 とて、部下の忠實職に殉ずる勇を賞し、一身の安危を忘れて、
 偏に國家のために潛水艇の將來を祈れり。さてまた、至尊に
 對し奉りては罪を謝し、部下の遺族のことを思ひては憐を
 乞ひていはく、



佐久間大尉遺書

小官は、茲に小官の不注意により、陛下の艇を沈め、部下を
 殺す大罪を謝す。仰ぎ願はくは、
 わが部下の遺族をして窮する
 ものなからしめ給はんことを。
 わが念頭に懸るもの唯これあ
 るのみ。
 最後に至り、海軍大臣以下上長官
 に對して最後の告別をなし、更に
 その末に、
 呼吸はすでに非常に困難なり。
 十二時四十分。

ではお喋舌の黒鳥が囀り、牧場では、木挽小屋の後の方でプロシヤ兵が訓練をやつてゐる。

村役場の前を通りかかると、小な鐵柵のある揭示場の前に大勢の人がたかつて居た。二年この方、ありとある不吉の報知や、負けた戰報や、徵發の事や、プロシヤ方のいろいろの命令や、そんな厭なものがみんな此處から來たのだ。また何かあるんだなと考へながら、足も止めず、僕はアメル先生の小な校庭へ這入つて往つた。

開いて居る窓から見ると、僕の仲間はもうみんな銘銘の腰掛に竝んで居て、アメル先生は恐しい鐵の定木ツグキを抱へ込みながら、その前を往つたり來たりして居る。僕はそつと這

フロック
の略。
Frock coat
シャツ
Shirts

入つて僕の机の前に坐つた。

僕は、アメル先生が青色の上等のフロックを著て、綺麗に襟のところを襷を取つた笹縁のシャツをつけ、參觀日か賞品授與式の時でなければ、被ることもない縁取の黒の絹帽を被つて居るのに氣がついた。そればかりか、教場には何か非常の事でもありさうで、嚴な空氣が滿ち渡つて居た。

しかし一番僕の驚いたのは、教場の奥の方の、いつも空虚な机の前に、村の人が僕等とおなじく黙つて坐つて居る事だつた。その人達の中には、三角帽を被つたオーゼー爺さん、前の村長さん、前の競賣吏員さんなどが居た。そして、この人達はみんな悲しさを顔をして居るのだ。オーゼー爺さん

讀一説

は、縁の蝕んだ古いA B Cの讀本を持つて来て、それを膝の上に乗せ、大きな眼鏡を開いた頁の上に置いて居た。僕が驚いて居る間に、アメル先生は講座に上つた。そして、優しい、しかも嚴格な聲で僕等に云つた。

「俺の小供達、これが御前達に俺の教へる最後の授業だ。ベルリンから命令が来て、エルザスとロートリンゲンの小學校では、ドイツ語の外教へてはならぬと云つて來たのだ。新しいドイツの先生が明日著くことになつて居る。今日はフランス語の教へじまひだから、俺はお前達に一所懸命聞いて貰はなければならぬ。」

この僅ばかりの詞が、僕をあつと動轉させてしまつた。ああ

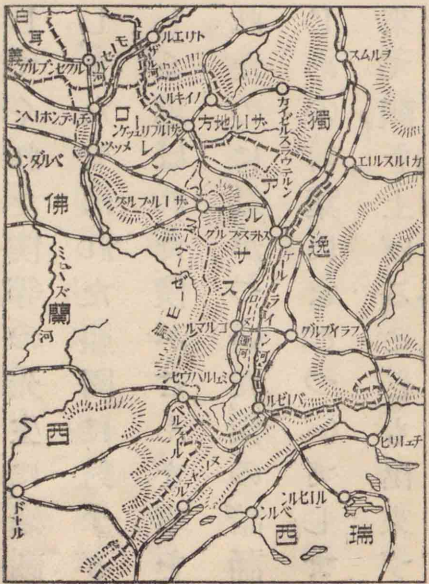
ベルリン
ドイツの首
府。
エルザス、ロ
ートリンゲン
佛國領なり
しが、西曆
一八七〇年
普佛戦争の
結果、ドイ
ツに屬せ
り。

みじめ

何といふみじめな情ない事だ。村役場の揭示はその事だつ

たのだ。

僕のフランス語の學び
じまひ。その僕はまだろく
ろく書く事さへも出來な
いのだ。もう僕は習ふこと
も出來ないと思ふと、學校



を休んで禽の巢を探し廻つたり、河で氷滑をしたりして、無駄に費した時間が今更怨しくなつた。つい今の先まで、重がつて荷厄介にした教科書、文典の本も、宗教の本も、今となつては別のつらい舊い友達のやうな氣がする。

盡一頁

先生が取つておきの著物を著て來たのも、この最後の授業に敬意を表する爲だつた。村の老人達の様子も、今までこの學校へ度々來なかつたことを悔むやうに見えた。この人達の來たのは、四十年もこの小學校に居て、立派に職務を盡してくれた僕等の先生に、感謝の意を表する爲でもあつたし、また失はれた祖國に對する義務を盡す爲でもあつたらしく思はれた。僕がこんな事を考へて居る時、僕の名を呼ばれたのに氣がついた。僕の諳誦する番が來たのだ。僕は眞はじめの言葉にまごついてしまつた。胸が一杯に籠み上げて來て顔を上げることも出來ず、腰掛から立つたまま身體の權衡を取つて居ると、アメル先生のいふ聲が聞えた。

「フランツ坊や、俺は今日はお前を罰しはせぬ。しかしお前は罰せられるのが當然だ。お前などは毎日きまりにいつて居たことだ。いつでも時間はあるのだ。明日勉強すればいい」と、どうだを、今日といふ今日、その結果がお前に分つたらう。全體エルザス人の教育を、いつもその通に明日に延して居たのが、エルザス州の何よりの不幸だつたのだ。今になると敵國の奴等はいふだらう。「何だ、貴様達はそれでもフランス人だといふのか。フランス語が書けも讀めもしない癖に」と、それに何と返事が出来る。」

先生の言葉はそれからそれへと盡きなかつた。先生は、フランス語は我我の先祖からもち傳へた大事な詞だから、我

我はこの詞をよく護つて、決して忘れてはならない。假令一國民が奴隸の境遇に落ちようとも、その國の詞を護つて居る間は、丁度牢屋の鍵を持つて居るやうなものだと説いた。そして、先生は文典を取つて、僕等に讀んで聞かせた。僕は自分でよくそれが解つて往くのに驚いた。先生の説明が、實によく僕の頭に這入つて往くのだ。僕はこんなによく先生のいふことを聞いて居たこともなければ、先生もこんなに辛抱して説明したことも無かつた。どうも、この氣の毒な先生は、ここを立ち去るに就いて、自分の知つて居るだけの事を、一度にみんな僕等の頭に詰め込んで往かうとするやうに思はれた。

その課目が終ると、今度は習字の稽古に移つた。先生は特別に僕等に渡してくれるために、新しいお手本を用意して來た。そのお手本には、美しい丸い字で、「フランス、エルザス。フランス、エルザス」と書かれてあつた。

銘銘がどんなに一所懸命字を習つたか見せたいやうだつた。一番年の往かぬ生徒等さへ、一心にちやんと覺悟して、これもまだフランス語だといふ風に、習字の線をわき目も振らず引いて居た。

屋根の上では、鳩が低い聲で咽喉を鳴して居たが、僕はそれを聞きながら考へた。鳩もドイツ語で啼くやうに教へられるのかしらと。(菊池幽芳—幽芳集)

菊池幽芳
小説家。名は清、水戸の人。
大阪毎日新聞記者。

三〇 雀

私は雀を観てゐます、常に観てゐます。雀は全くかはいい。彼は全く素朴で誠實です。極めて神経がこまかで、慥巧で、時慌てて、うぶで、單純で、それはあどけないものです。

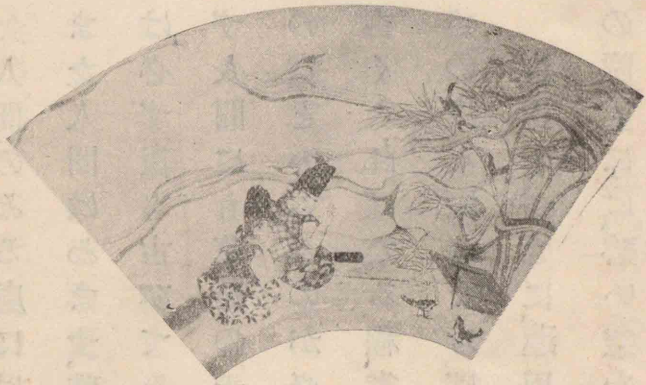
簡素な雀の生活に親しんでゐると、自然に人間の心もつつましくなります。單純になります、そしておとなしく素直になつてしまひます。私の葛飾の生活は固より簡素を旨としましたので、猶更雀によく似たその日その日を送りましたが、誰でも本當に雀の聲に聴き入つた時には、その時だけでも俗念を離れて、すがすがとなりまます。さういふ尊い瞬間

葛飾
千葉縣東葛飾
郡地方の汎稱
なほ(猶)

は無論誰にも必要なのです。

人間のゐる處には必ず雀はゐます。雀のゐる處には必ずまた人間はゐます。殊に古くから人間の住居してゐる處には、必ず雀も古びてゐます。一つの里があれば、その里には、必ず人間にも草分の一人の祖先があつたやうに、雀にも草分の雀といふものが必ず一羽はあつた筈です。人間の血脈が古くなればなる程、雀の血脈も古くなつて、相共にその親しさの度も深くなるばかりです。

青田つづきに、蓮田の白い蓮の花が咲き盛る葛飾あたり
の晩夏には、碧い空を雀も軽く飛び翔ります。ちゅつちゅつ。
時時白い蓮の花にすれすれに、翼と尻尾とを一緒にくぎり



雀と扇面寫經

をつけて飛び抜けたり、すぐ側の瑠璃色の露草の花がいつ
 ばいに咲いた、肥溜の屋根の上など
 へ轉げていつたりします。その露草
 にも、朝は涼しい白露がいつばいで
 す。其處でも雀はまた二羽三羽と寄
 り合つては、さも涼しさうに頬つべ
 たを小な片足でぶるぶる振ふ。青蛙
 も飛び跳ねます。蟲も鳴きます。全く
 世の中は涼しい。
 遠くの大都會の空には大きな煙
 突が幾百本となく林立して、眞黒な煙が一面に渦巻く物凄

さも、雀の聲をたよりにして白い蓮の花の向に離れて見れ
 ば、却つて親しく、如何にもこの世が頼しくこひしく感ぜら
 れます。その野原の一本道を、手を振つて來る郵便脚夫の姿
 も、やつぱり懐しい世相の一つでせう。肥溜の屋根の雀も、見
 馴れた脚夫の姿を見ると、嬉しさうにちゅつちゅつとお辭
 儀をします。何かのたよりが欲しさうに。

またある朝、私が散歩をしてゐると、雀がはらはらと一羽
 飛んで來ました。其處には木槿の垣根がありました。雀はそ
 の枝にとまらうとすると、ついとそれて、又はらはらと斜に
 向の萱屋根の方へ飛んで行きました。見ると、その小枝には、
 白いすがすがしい木槿の花が、たつた一輪咲いてゐたので

くらゐ。

ありました。雀の飛んで来た機縁から、私は初めて其處に木
 槿の花の存在を知り、その花がまた枝と共に、幽に見えるか
 見えないぐらゐに揺れてゐるのが分りました。風が幽に吹
 いてゐたのでした。このこまかな感覺、このこまかな自然の
 わななき、この閑寂カウジの境地に突然創造されたその白い木槿
 の花、その花の幽なる律動。

また或日の午前のやや冷い空氣のうちの事でした。畑を
 歩いてゐると、一羽の雀が玉蜀黍の間を、幽に羽裏を光して、
 ひらひらと風に吹かれて、うしろ向に流れて來ました。それ
 は程よい初秋の微風に吹かれて、半はすがすがしさに、わ
 ざと翼も羽ばたかないで、斜に吹かれて來るのでした。と、雀

が首を縮めてちちつと鳴きました。又ちちつと鳴きました。
 見ると、私ははつとしたのでした。其處には玉蜀黍の燃え立
 つやうな紅い金色の垂毛が、新鮮な淡い緑の實の皮の上か
 らふさふさと垂れて、揺れそよいでゐました。幾つも幾つも
 揺れそよいで居りました。雀はその紅い垂毛に觸れ觸れし
 て、嬉しさうに、その時その時に一つづつ羽ばたいて、また吹
 かれ吹かれして行きました。雀はその玉蜀黍の毛と遊んで
 ゐたのでした。雀がその毛に觸れると、その毛は一層紅く揺
 ぎ出すのでした。つくづくと見上げると、その長い葉も、その
 莖の上の新しい花穂も動いてゐました。その上の青空まで
 がまた幽に動いてゐました。何といふ澄みわたつた、そして

新鮮な青い高い空でしたらう。

ほきりと向で誰やらが玉蜀黍を一つもぎました。そしてまた元の静けさに還りました。

ひとり林間などを心静に徘徊してゐると、よく雀の鳴聲が耳につきまます。その聲が耳につく拍子に、また何の木の花の匂とも知れず、幽な花の香が流れて来るものです。芭蕉はかういふ神祕の世界に、しみじみと靈を開いて聴き入つたものかと思ふと、自然と掌が合はされます。(北原白秋―雀の生活)

何の木云云
芭蕉の句「何の木の花ともしらず匂かな」

北原白秋
詩人。名は隆吉。福岡縣柳河町の人。明治十八年生ま

先月
大正二年一月。

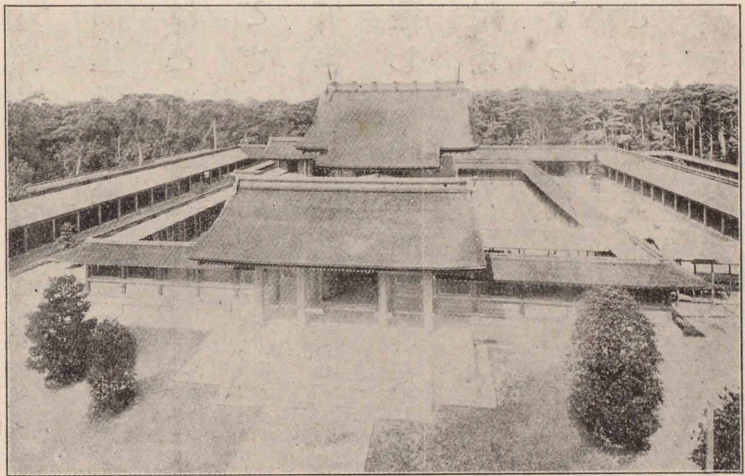
三一 明治天皇の御遺物を拜すその一

先月十七日、宮中より、地方長官一同に午餐を賜ふ旨仰せ

靈―靈

出されましたので、例刻に參内致しましたところが、十一時すぎ權殿參拜を許されました。權殿と申すは、崩御の後一年間皇靈を祭らせられる宮中の御室でございます。即ち私共は、この度先帝の皇靈を拜する特別の御恩典に預つたのでございます。そこで、私共は長く廣い御廊下に整列致しまして、宮中奥深く權殿に詣つて、一人づつ最敬禮を致しました。蓋しその瞬間は、何人と雖も一種の靈感に打たれないものはなかつたのでございませう。その權殿と申すは、平素皇后陛下の謁見所たる桐の間を以てこれに充てさせられたのでございます。

それから更に奥殿に進みまして、御學問所を拜觀致しま



明治神宮

派な御部屋かと申すに、實に意外なことで、平常私どもが參

した。御學問所は表御座所とも
申し上げ、萬機の政を御親裁遊
ばされる處でございます。先帝
には長く茲に在らせられて、徳
教を御敷きになり、大憲を御定
めになり、或は國交を御修め遊
ばされ、時に或は膺懲の師を起
させられるなど、宏謨雄圖一に
この中から發せられたのでご
ざいます。然らばどんなに御立

まゐる(參)

観一観

内の節休息を許される御殿の方が、却つて遙に御立派であ
る。しかもあまり廣くない二間續の御部屋であつて、瀟洒た
る檜の白木造ではあるが、別段これと申す御裝飾も遊ばさ
れてない。御机も御椅子も實に御質素なもので、絨毯の如き
は當初敷かれたままのもの故、後には色も大分褪めて參り
ましたので、侍臣から御取換のことを屢願ひ出しましたが御
許がなくて、竟に今日に至つたものださうでございます。

御部屋は三方壁を以てめぐらし、南の一方に硝子戸があ
り、御机は御座所の中央に南向に御据ゑになつてございま
す。この御構造を拜觀すると同時に、夏分はさぞ御暑い事
でいらつしやつたらうと感じましたが、先帝には御暑さの御

厭もなく、連日此處に出御あらせられたのでございます。これにつけても、

年年に思ひやれども山水を

汲みて遊ばむ夏なかりけり。

の御製を思ひ起して、誠に恐懼に堪へませんでした。のみならず、この御部屋にはストーブの御設がございますけれども、三十七年の冬以來御もちるがない。竊に承るに、その年の冬の或朝、例の如くストーブに火を焚いてございましたが、先帝は出御遊ばすや否や、「火を消せ」と仰せられた。侍従は何故か分りませんが、唯仰のままに火を消しました。さてその後と申すものは、如何なる酷寒と雖も、一切ストーブの御使

ストーブ
Stove

用を御許し遊ばされなかつたのでございます。勿論大御心のほどを伺ひ奉るわけには参りませんが、侍従方の推測し奉る所によれば、當時皇軍が滿洲の野に大敵と戦ひ、飢寒に苦んでゐるのに御同情を垂れさせられ、兵士と艱難を共にせんとの大御心に出でさせられた次第であらうと申すことでございます。それ以來は、ただ一箇の小さい丸火鉢のみを御使用遊ばされたとの御事。今その御火鉢を拜觀するにつけても思ひ出されるのは、斯民のうへを思ひやられた御製、

桐火桶かきなでながら思ふかた

すきまおほかるしづが伏屋を。

でございます。

三二一 明治天皇の御遺物を拜すその二

この御部屋の拜観が終つて更に別室の拜観を許されま
した。この御部屋には、先帝の御學問所において御使用にな
つた御遺物全部が、そのままに据ゑ置かれてございます。こ
れは今上陛下の大御心に出でさせられたやうに拜承致し
ました構造も、方向も、廣さも、御學問所と全く同一であつて、
すべての御遺物も、昨年七月十三日、即ち先帝最後の出御當
時の儘に御備附になつてございました。床の間には、その當
時の御軸物が掛けてあり、その前方には御劔が數振横たは

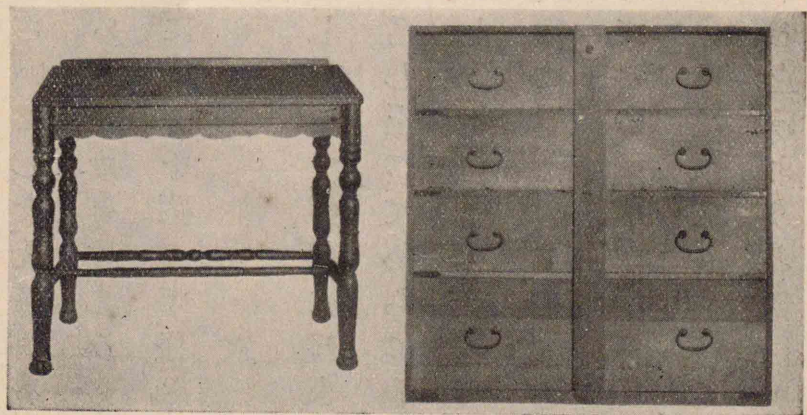
り、御机は中央に南面して置いてございました。先帝御在世
の折は、我等如き者が、御机に接近することなどは思ひも寄
らぬことでございますが、今回は特に御許を蒙つて、仔細に
拜観する光榮を得ました。

まづ、御机は羅紗を鏡張にしたテーブルで、中程に焼痕が
ございます。これは先帝が御煙草を召し上つていらつしや
つた節、臣下より政務を言上致しました處、先帝には御吸ひ
かけの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、御熱心に
御聽取あらせられた折、煙草が墜ちてこの焼痕がつくやう
になつたのだと申すことでございます。さてこの焼焦のあ
るテーブルの羅紗を御取り換へ申し上げようと、侍臣から

Table
テーブル

幾度となく願ひ出ましたけれど、
も、斷じて御許がなかつたのこ
とでございます。蓋し何物でもそ
れにて事足る以上は、修理さへ御
控へ遊ばされる御儉徳の至と拜
察し奉ります。

御硯箱は、明治二十年に、鹿兒島
縣から御取寄になつた竹製の品
でございます。そのなかの筆は普
通の御品で、我等臣下の日常用
る物とかはらないのみならず、毛



明治天皇御遺物

尖は禿び、軸の文字は見えないほどに御使ひふるしになり、
墨も亦同様で、一寸位に磨りへらされた品でございました。
缺も亦同じく普通市場にある品で、その傍に、學校生徒等の
用ゐる普通のインキがございました。最初は、侍従の方が何
かの調に用ゐた儘、其處に置き忘れたのであらうと存じま
したが、やはり先帝の日常御もちゐになつたものだと承つ
て、今更ながら御儉徳の高きに感激し、自ら顧みて慙愧に堪
へなかつた次第でございます。

御椅子の下に獅子の毛皮が敷かれてございます。これは
青山御所において遊ばされた頃から、久しく御使用になつ
たもので、毛も次第に磨り切れ、皮も遂に破れるやうになり

かは(皮)

ました。そこで臣下より御取換を願ひ出ましたが、なに、これでよい」とて御許がない。せめて御修理をと願ひ出て、漸く御許を得た。しかし適當の皮がないことを言上致しました處、何の皮でもよいとの思召であつたので、赤犬の皮を以て補足したと申すことで、侍従が「この邊が犬の皮です」と説明して居られました。

ホワイトシャツ

White shirts ツ

ボール

その傍に、ホワイトシャツを入れる白いボール箱やうのものが、澤山に積み重ねてございましたから、何に遊ばす物か」と侍従に尋ねました處、やはりシャツの空箱であるが、書類を入れるに便利であるとして、御手許に留め置かせられた物であるとのことございました。

隨一隨

御歌所

宮内省の一
局。御製に關
する事務、臣
民詠進歌の選
擇、御歌會の
儀式典例等を
掌る。

大臣方より上奏御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れて、表に主務者の名を署して上るのださうですが、御親裁の後、別の紙袋に入れて御さげになる。そして御不用になつた前の紙袋は、一枚たりとも御棄て遊ばさず、隨時御詠出の御製を御認めになる御詠草に御用ゐになりましたさうで、それを御側の方が別紙に拜寫して、御歌所に御廻し申したのだとこのことでございます。實に天下の物は、用ゐるにその途を以てすれば、一として無用の物はない。先帝はかく萬機の政を聞き召されながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用遊ばされたのでございました。

又傳へ承るに、先帝が皇室費豫算を御親裁遊ばされる節

は、詳細に御覽になり、祖宗の祭祀及び慈善に關する費目の外は、務めて御節約に相成り、些にても冗費をば御省き遊ばしたと申すことでございます。一天萬乘の大君におはしましなから、禿びた御筆を御用ゐになり、破れた敷皮を御下げにならぬといふのは、いかなる思召でいらせられませうか。皆これ節すべきを節して、有用の事にのみ御用ゐ遊ばさうといふ大御心に外ならぬことと存じます。

さて御次の間には、造花や、彫刻や、種種な物品が備へられてございました。これを拜見いたしまするに、學校や展覽會等に行幸の節、御獎勵のため御持ち歸り、又は御買上にならせられたもので、御裝飾の御目的とは考へられませぬ。それ

故に、造花の如きも格別のものでなく、何年前のものか、色も褪めはてて、殆ど裝飾の用を爲さぬものまで、その儘になつてあるのでございます。その他美術工藝品の如きも、皆御獎勵のため、俗人の道樂とは全く趣を異にしていらせられます。御製に、

千よろづの民と偕にも樂しむに

ますたのしみはあらじとぞ思ふ。

とございますが、實にこのやうな御樂を求めさせられようとして、先帝には長い年月の間、大いなる御苦心を遊ばされたのでございます。

今や我が國運は、先帝の長き御心づくしの御蔭を以て、隆

よろづ

隆として興り、我等は世界の一等國民となりました。顧みれば、我等は長い間、聖天子御一人に非常の御苦勞をお掛け申し上げましたのでございます。ここに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に、

國民のちからのかぎりつくすこそ

わが日の本のかためなりけれ。

の御製をも同時に服膺して、公人としても私人としても、力のあらんかぎりを盡し、以て「我が日の本のかため」のため、應分の貢獻をなし、御高恩の萬分の一に對へ奉らんことを誓ふ次第でございます。(笠井信一)

笠井信一
法學士。元治元年生まる。静岡縣の人。北海道長官。諸縣知事等に歴任す。

三三三 忠義の犬

物部守屋の家臣に捕鳥部萬とらべのまゐといふ忠義者が居つた。蘇我馬子が守屋を攻めた時、萬は手兵一百人を率ゐて、守屋の難波の邸宅を守護して居たが、主人戰死の報を聞いて大いに失望し、夜に乗じて潛に遁れ、故郷茅渟縣ちづのの有眞香邑ありまかの山中に匿れた。間もなくこのことが朝廷に知れたので、忽ち討伐の衛士を遣された。

折から、萬は身に弊衣を纏ひ、弓を持ち、劔を帯びて、山の中から出て來た。それを見た數百人の衛士は、立所にこれを包圍しようとした。萬はさながら猿のやうに身を躍らせて、竹藪の中にかくれ、忽の間に數人の衛士を射殺したので、討手

物部守屋
尾與の子。大連。大臣蘇我馬子と權を争ひ、終に馬子に殺さる。(一二四七年)
蘇我馬子
稻目の子。大臣。物部守屋を殺して權を擅にし、遂に崇峻天皇を弑す。(一二八六年)
茅渟縣の有眞香邑
今の大阪府泉南郡の内。

たふる(倒)

の面々は恐れ惑うて、容易に近づくことは出来なかつた。勇敢な萬は、機會はよしと竹藪の中から駆け出したので、それ遁すなと、衛士等が一時に射かけた矢の一つが、萬の膝



萩野由之

に中つた。萬はその矢を抜き取つて射返したが、何しろ膝を射られたので、地に倒れながら大音あげて、

「汝等よく聞け。萬は天皇の御楯となつて勇を示さうとしたのである。それに汝等はその理由も問はずに、吾を苦めるとは何事である。さあ、吾に罪があると思つたら、立派に進んでその譯をいへ。」

とよばはつた。衛士等は競うて萬を射た。矢は宛然雨のやうに、四方八面から萬の體に集つてくる。萬は巧に拂ひのけながら、三十餘人の敵を射殺したが、敵は數百人、此方はたつた一人、しかも身には重傷を負うたのだから、最早如何ともしやうがない。

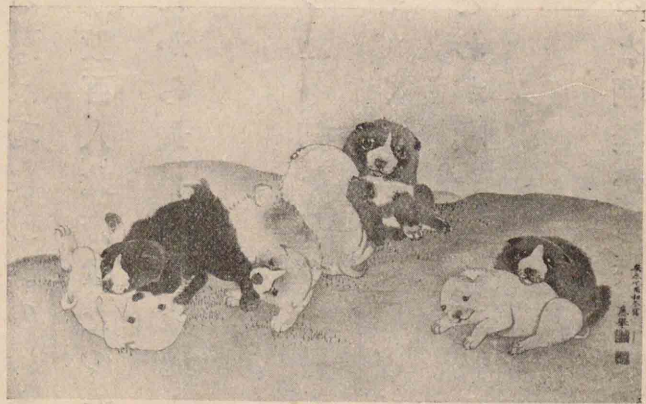
さすがの萬も、今はこれまでと思つたか、劍をもつて弓を三つに截り、またその劍をば力に任せて、くの字形に屈けて傍に投げ棄て、短刀を引き抜き、われとわが喉を貫いて、實に花花しい死様をした。

河内の國司からこの趣を奏聞すると、朝廷からは直に萬の死骸を八段に斬り、八箇所に分つて梟せしめた。

残一殘

ほえ^〇吠

ここに、萬が永年飼ひ馴して置いた一匹の白犬があつた。萬はこの犬をわが子のやうに可愛がつて育てて居たので、犬も主人の恩に感じて、日夜忠實に働いて居つたが、主人が討死したばかりか、死骸は殘酷にも八裂にされて、方方に梟せられたので、白犬は畜生ながらもこのあさましい有様を見て、無念骨髄に徹したのか、夜も晝も、悲鳴をあげてその場を吠え廻り、或時は天を仰いで泣き、或時は地に伏して泣き、胸の苦を天地に訴へ



(筆 舉 應) 兒 狗

うゑ^{〇〇}じに
(飢死)

ようとする有様は、人間の情と少しの變もない。かうして、白犬は數日の間、主人の死骸の傍を去らなかつたが、或時番人の隙を窺つて、その首を啣へ出して、程近き古冢に隠し、自分も一所にその側に臥して、生きた人に仕へるやうな様子をして居たが、元より飲まず食はずに居たから、遂に五六日の後には飢死してしまつた。

國司の方では、大切の萬の首級がなくなつたので、これは一大事であると、方方探索した結果、右の次第が解つたので、皆皆舌を卷いて、さてさて感心を犬である。萬物の靈長と誇つてゐる人間も、これを見ては恥しい次第である。ありのままを朝廷へ奏聞したがよからうといふので、白犬の忠死の

事を詳しく奏聞すると、朝廷からは直に命令が下つて、
「萬が犬の行は世にも稀に聞く所である。後の爲にもなる
事ゆゑ、萬が遺族に命じて墓を造らせ、厚く葬儀を營ませ
よ。」

と仰せ下され、萬が死骸諸共に、白犬の死骸をも下げ渡され
たので、萬の遺族は、今更のやうに白犬の忠死を感じ、有眞香
邑に萬と犬とを葬り、見事を墓標を立てて後世に傳へたと
いふことである。(萩野由之—讀史の趣味による)

三四 角笛の響

その一

フランスのアルプスの山へ行きますと、夕方など、霧のか

萩野由之
新潟縣相川町
の人。文學博
士。國史家。
高等師範學校
教授及び東京
帝國大學教
授に歴任す。
大正十三年一
月歿す。(二五
二〇年—二五
八四年)

アルプス
歐洲中最大
なる山系。
Alps
西北はフラ
ンス、ドイ

ツ、スウイ
スト、南は
イタリヤと
の境を劃
す。

かつて来る草原や杉の森の中から、角笛の響が遠く近く聞
えて來ます。谿を隔てて向の山から、その響が林や丘や谷間
に衍して、悲しく物寂しく小暗くなつた小途の上へ、微にた
ゆたひます。

何の爲の角笛でせうか。これは一日中草原へ放しておい
た羊の群を呼び集める爲に、牧童が吹く笛の音です。羊は長
い草の中や、夏草の咲きみちた森蔭を、一日中自由に遊びま
はつて、思はず遠くまで迷つて行く中に日が暮れます。そこ
で番をしてゐる羊飼の子供は、まづ犬をやつてそれを集め
ます。羊飼の犬ぐらゐる賢いものはありません。皆さんは澤山
の羊の群が、一匹か二匹の犬に守られて通つて行くのを見

教へ。

遅遅

必ず。

た事がおありですか。幾十幾百とない白い羊の群は、草原から、森の中から、八方から、犬に教へられて、むくむくと雲の涌くやうに一つの處へ集つて來ます。犬は鳴きながら四方八方をかけ廻つて、草の中へ、森の中へ、谿の中へ飛び込んで、一匹残らず遅れて道を失つた羊を探し出します。その集つて來た羊のまはりを、犬は前へ、後へ、左右へ驅けまはつて、遅れたものを叱りつけ、弱つたものをいたはり勵すやうにして、次第に羊小舎の方へ連れて來ます。

それでもまだ見落されて迷つてゐる羊が、草の中に居るかも知れませんが、羊飼は角笛を吹き立てます。その響が四方の林や谿にひびき渡ると、どんな處に迷つてゐる羊でも、必ずその響をたよりに集つて來ます。中には頸に鈴を付けた羊がゐます。その鈴の響が、夕闇の中で、草の葉の茂つてゐる中でするのは、いかにも寂しい、また懐しいものです。

この角笛の響には、フランスの舊い物語が籠つてゐます。今日アルプスの山中で、この羊飼の笛の音を、夏の夕方耳にした人ならば、必ずその物語を思ひ出すでせう。

昔昔、今から千百年以上の昔のことです。今のフランスとドイツと兩國に互つてその領土を占めてゐた、チャールス大帝といふえらい王様が、ありました。その當時の歐羅巴は、一時全くこの王様の支配の下に置かれた位の勢でした。

Charles the Great
 年 一八一四
 曆七六八年
 に即く。(西
 興して帝位
 馬帝國を再
 張し、西羅
 に版圖を擴
 佛國王ビビ
 ンの子。大
 帝
 チャールス大

ピレネー山
フランスと
スペインと
の國境を劃
する山脈。
山中に温泉
多し。

ところが、その頃今のスペインへはアラビヤ人が地中海から侵入して、非常な勢でその土地を征服して、チャールス大帝へ對しても、いつも謀叛を企ててゐました。チャールス大帝はそれを怒つて、軍隊を引きつれて、ピレネー山といふ高い山を越えて、スペインの地へうち入り、アラビヤ人等を征服してしまひました。

さてチャールス大帝は隊伍を整へて、しづしづとピレネー山を越えて、フランスの空の方へ向つて歸つて來ました。幾月もの戦のために、人人は早く故郷の空が仰ぎたく思ひ、故郷の山河を望みたく思ひ、そしてその美しいフランスの土地から産する紫の葡萄の味を思つて、胸を躍らせながら

勇んで山を登つて來ました。

ロオラン
Roland

けれどその時、チャールス大帝一人だけは、何となく沈んだやうな顔色をして、部下の者どもがはしやいであるにも關らず、黙つてとかく浮き立たない様子をしてゐました。それはいつも自分の傍を離れずにゐた、自分の甥のロオランといふ英雄が傍にゐなかつた爲でした。

ロオランはその時軍隊の殿となつて、最後から敵のおさへとなつて來るのでした。といふのは、アラビヤ人はチャールス大帝に降服の約束を結んだけれど、いつその約束を破つて謀叛を起さないとも限らないからでした。若しアラビヤ人が叛いて、背後からロオランに襲ひ懸つたならば、その

を^〇る

急を告げる爲に、最後の手段として角笛を吹くことになつてをり、それを合圖にチャールス大帝の軍はすぐ引き返してロオランを助けることに決めてあつたのです。

三五 角笛の響 その二

もう大帝の部下は喜に小踊して山路を登りつめ、そろそろくんだり阪の方へ向つてゐました。フランスの空が彼等の眼の前に輝きだし、美しいフランスの平野が彼等の脚の下に廣がりました。彼等は跳り上つて萬歳を叫びました。けれども大帝一人はやはり黙つて、沈んだ顔付をしてゐました。そして今彼の部下が叫んだ萬歳の聲がまだ消えてしまは

ないうちに、大帝は馬をとどめておつと耳を澄し、部下を顧みて、今角笛が響いたではないか。ロオランの角笛がと云ひました。

部下の者にはただ谿を走る水の音と、林の中の風の響しか聞えませんが、皆の者は大帝に、これは風か水の音でせうと云ひました。軍隊はまた悦び騒いで大帝を包んで下り阪をおり初めました。けれどチャールス大帝は、ロオランのことが何分にも氣に懸つてなりません。只一人黙黙として馬を前めてゐました。

すると今度は、たしかにはつきりと、ほおろ、ほおろと云ふ角笛の音が、人馬の騒の下に聞えて來ました。チャールス大

斷—斷

帝は「それ」と云つて馬の頭を立て直しました。今度こそは明に皆のものゝ耳にも聞えました。部下の者も一時に足を返して、今来た路へ急ぎました。角笛の響は斷續キレ切れして聞えて來ます。

ロオランはどうしたでせうか。彼は四五人の從者と共に、軍隊の最後からしづしづと山路へ懸つて來たのでした。するとチャールス大帝が心配してゐたとほり、それまで從順な風をしてゐたアラビヤ人等は、俄に大聲で叫び出し、大勢の人間が一時に武器を執つて、ロオランの背後からどつと襲ひ懸りました。彼等が恐れてゐたのは、この英雄ロオランとその部下とでした。今そのロオランが、小人数で軍の最後

しまひ。

から山路へ懸るのを見ると、この人人を討ち取つてしまひさへすれば、チャールス大帝の大軍とても恐るるに足らないと思つたのでせう。いちはやくロオランの身邊に迫つて、八方から兵器で圍んで襲つて來るのでした。そして口口に、「ロオランよ、自分等の軍へ降れ。でなければお前の命はないぞ。チャールスの軍は、もはやお前を置いて遠く行つてしまつた」と叫ぶのでした。

ロオランはその中に突つ立ち、八方を睨みつけ、汚しい。如何で汝等に降参するものか。我が劍一度鞘を脱すれば、汝等の頭は秋の木の葉のやうに拂ひ落されるぞ」と大聲に叫び立てました。その勢でアラビヤ人は一時四方へ退きました。

が、また多勢を頼んで集つて來ます。従者は約束の角笛を吹き立てようとしましたがロオランはそれをとどめて吹かせません。そして彼の大切にしておいた名劍を抜き放つて、獅子王のやうに荒れ狂ひました。

けれど、何分にも數知れぬ攻手の爲に、さすがのロオランも次第次第に疲れて來、部下の者も或は傷き或は死にました。もう如何とも仕方がないので、彼は自分で角笛を取りあげて、呼吸のかぎり死物狂に吹き立てました。角笛の吹口は、ロオランの口から出る血で赤くそまりました。その響は山に谿に、恐しい大牛の最後の叫のやうに飭して鳴り渡りました。

きずつく(傷)

いは(岩)

それを見ると、アラビヤ人等は一齊に聲をあげて、八方からロオランを取りまいて肉薄して來ました。ロオランもはや自分の最後が來たと覺悟をきめました。それにしても、自分が今まで幾十回幾百回と戦つて勝つて來た、その大切な名劍を蠻人の手に渡したくない。むしろ岩を切つて劍を折つてしまはうと、傍の大岩にはつしとばかり切り付けました。劍の先から火花がぱつと散りました。その時ロオランは、今まで自分が戦つて來た幾つかの勝利の姿が、まざまざとその火花の中に浮び上るのを見ました。彼は遂に大木の陰に倒れました。

アラビヤ人は一度にロオランを自懸けて驅け寄りました。

吉江孤雁
早稻田大學教授。名は喬松。長野縣の人。明治十三年生まる。早稻田大學出身。大正五年フランスに遊學す。

その時です。ロオランの閉ぢて行く目の前へ、チャールス大帝を先頭に、六萬の大軍は逆落に山を驅け下りて、関の聲をあげながらアラビヤ人の中へ殺到しました。角笛の響の中には、今でも尙この英雄ロオランの最後の恨が籠つてゐます。

夏の夕方アルプスの山中で、一度でもこの角笛の音を耳にした人は、この悲しげな物寂しげな、そして古い古い昔物語を籠めた不思議な響を思ひ出さずにはゐられないでせう。(吉江孤雁「角笛の響による」)

中等國語讀本 新修一版卷一 終

國語假名遣一覽

中等國語讀本 新修一版附錄

せぬ(所居)

みえ(外見)
はえ(生)

ゑ

ともゑ(巴) (刺繪)
ゑる(彫る)
ゑぐる(列る)
ゑぐし(醜し)
ゑ(餅)
ゑつく(嘔吐)
ゑ(穢)

お

お(を)尾
をば(な)尾花
を(緒)
をどし(穢)
はな(を)鼻緒
を(麻)亭
を(け)桶

わ

あわただし(倉皇)
いひわけ(言分)
ことわけ(辭分)
のわけ(野分)
おひわけ(追分)
うらわ(浦回)
しまわ(島回)

ぢ

ねぢ(く)拗
あぢ(さ)ぬ紫陽花
なぢ(ら)ぶ(準)

ず

ねず(み)鼠
ねず(み)杜松
はず(管)理
やは(ず)矢筈
は(ず)み(機)
は(ず)み(機)

Handwritten notes and examples in the left margin, including characters like せぬ, ゑ, お, わ, ぢ, ず and their various readings and meanings.

おい(老)
くい(梅)
むくい(報)
音便き・し(ガ)トナ
ルモノ。

しいじ(四時)
しいか(詩歌)
むいか(六日)
さいたま(埼玉)
さいは(幸)
さいづち(終棲)
たいまつ(松明)
ついち(築地)
きさい(后)
ひいき(最良)
ついたち(朝)
ついたて(衝立)
やいば(刃)
ついで(序)
かうがい(筭)
さいて(指して)
かいて(書いて)
さいて(咲きて)
おもい(重し)
あしい(悪し)
かなしい(悲しき)

少数ノ系ヲ暗記スル。其ノ他
ハエカヘテアル。
系(繪)
ゑのぐ(繪具)
ゑがく(畫く)
ゑどる(彩る)
ゑかき(畫工)
ともゑ(巴)輻繪
ゑる(彫る)
ゑぐる(剝る)
ゑぐし(醜し)
系(餌)
ゑづく(嘔吐)
系(穢)
ゑと(穢土)
ゑぼし(烏帽子)
ゑんじゆ(槐)
ゑむ(笑)
ゑがほ(笑顏)
ゑくほ(靨)
ゑつほ(笑壺)
系(衛士)
ゑふ(酔ふ)
こゑ(聲)
つゑ(杖)
つくゑ(机)
ゆゑ(故)
ゆゑん(所以)
すゑ(据)
すゑぶろ(据風呂)

きと(消)
すゑ(體)
ふゑ(殖)
こご(凍)
きこ(聞)
ほゑ(吠)(吼)
もゑ(燃)
もだ(悶)

語頭テハおトをガ紛レ易
イ。次ノ外ハおテアル。
を(男・雄・夫・牝)
をす(牝)
をつと(夫)
をとこ(男)
さつを(獵夫)
たけを(猛男)
ますらを(丈夫)
みやびを(風流男)
めをと(夫婦)
やもを(鰥夫)
をひ(朝姪)
ををし(雄々)
を(小)
をぢ(伯父・叔父・老翁)
をば(伯母・叔母)
をとめ(少女)
を(女)
をんな(女)
をみなへし(女郎花)
を(峯・岑)
をのへ(尾上)
を(尾)
をばな(尾花)
を(緒)
をどし(緘)
はなを(鼻緒)
を(麻・苧)
をけ(桶)
をさ(箆)
をだまき(苧環)
をがら(麻幹)
をか(岡・丘・陸)
をかほ(陸稻)
をかむ(拜)
をかす(犯)
をき(荻)
をきむし(尺蠖)
をけら(朮)
をこ(痴)(愚)
をこがまし(痴)
をかし(可笑)
をこせ(臙)
をさ(長)
をさなし(幼)

ばせを(芭蕉)
まをす(申)
みさを(操)
みを(添水脈)
みをつくし(零標)
やをら(徐)
わざを(俳優)
ふト書イテをト發音スル場
合。
あふひ(葵)
あふぐ(仰)
あふぐ(煽)
あふぎ(扇)
あふる(煽)
あふぢ(棟・樗)
あふみ(近江)
とほたふみ(遠江)
きのふ(昨日)
けふ(今日)
さふらふ(候)
たふる(仆倒)
たふとし(貴)
はふる(投)
ふくろ(藁)

語頭テハハトハハ紛レナ
イ。語中・語尾テハ紛レ易
イ。次ノ外ハハヲ用ケル。
あわ(泡沫)
あなわ(水沫)
あわつ(周章)
あわたし(倉皇)
いひわけ(言分)
ことわけ(辭分)
のわけ(野分)
おひわけ(追分)
うらわ(浦回)
しまわ(島回)
うわる(植)
かわく(乾渴)
くつわ(轡)
くるわ(麻)
はにわ(埴輪)
くわ(慈姑)
ことわざ(諺)
しわざ(爲業)
ことわる(斷理)
こわいろ(聲色)
こわだか(聲高)
こわね(聲音)
さわぐ(騒)
さわやか(爽)
しわ(皺)
しわむ(皺)

づト書ク語ヨリズト書ノ語
ノ方が少イ。次ニアゲル他ハ
づヲ用ケル。
ず(從者・儒者)
ず(誦)
ずずじゆず(數珠)
ずみ(柘)
ずるし(ずるける)(狡猾)
怠慢)

ずわ(條)
あんず(杏子)
ゆず(柚子)
りんず(綸子)
いしず(基礎)
こず(系・梢)
かず(數)
かならず(必)
きず(傷・疵・瑕)
くず(葛・國柘)
すず(鈴・錫)
すずき(鱸)
すずし(生絹)
すずし(蘿蔔)
すずしろ(蘿蔔)
すずな(菘)
すずめ(雀)
すずり(硯)
すずる(漫)
たたずむ(竹)
たたまひ(様子)
なずら(準)
ねず(杜松)
ねずみ(鼠)
はず(管・弭・理)
やはす(矢管)
ゆはす(弭)
はずみ(機)
ひず(歪)
まず(雜・交・混)
みみず(蚯蚓)
もず(百舌鳥・鴟)
さ(行變格活用)の濁れる
もの

○時代とともに發達變遷した國語
には發音が相似てゐて假名の同
じてないものがある、之を書き
別けるのを國語假名遣といふ。
○記憶に便せんがために少數のも
のをあげて他を類推せんとする
のが本表の主旨である。

一年C組
山崎智徳

